

# 宇治西Ⅲ遺跡

加茂スマートインターチェンジ新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査2

2025年3月

雲南市教育委員会

# 宇治西Ⅲ遺跡

加茂スマートインターチェンジ新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査2

2025年3月

雲南市教育委員会



# 序

宇治西Ⅲ遺跡は、古墳時代終末期（7世紀前半）に造られた横穴墓です。令和3年度に加茂スマートインターチェンジ整備工事に伴い発掘調査を行ったところ、副葬品として大刀1振が出土しました。大刀は、X線写真撮影の結果、鏝などの部材に銀象嵌の文様があることが明らかになりました。象嵌装大刀は、当時最先端の技術であり、大和政権の工房で製作されたものとみられます。県内では松江市岡田山1号墳の大刀が知られていますが、確認例は少なく希少です。

本書は、この象嵌装大刀をはじめ、横穴墓の調査についてまとめたものです。雲南市加茂町を拠点とした有力者が入手した象嵌装大刀は、出雲の古代史を検討する上においても重要な資料です。本調査で明らかになった成果が歴史研究や、ふるさと教育に広く活用されましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりご協力いただきました西日本高速道路株式会社中国支社、鳥根県教育庁文化財課、地元関係者の方々に感謝申し上げます。

令和7年3月

雲南市教育委員会

教育長 小田川 徹哉



# 例 言

1. 本書は、雲南市教育委員会が実施した加茂スマートインターチェンジ整備工事に伴う宇治西Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査地は次のとおりである。  
宇治西Ⅲ遺跡 島根県雲南市加茂町三代1662-6
3. 調査年度は次のとおりである。  
発掘調査 2021（令和3）年度  
報告書作成 2024（令和6）年度
4. 調査組織は次のとおりである。  
〔令和3年度〕  
事務局 景山 明（教育長）、佐藤慎治（教育部長）、福間 央（教育次長）、板垣 旭（文化財担当次長兼課長）  
発掘担当者 高橋誠二（文化財課主幹）、高田遼和（主事）、福田ことり（主事）  
〔令和6年度〕  
事務局 小田川徹哉（教育長）、中村和磨（教育部長）、金森里志（教育次長）、志賀 崇（文化財課主幹）  
報告書担当 角田徳幸（文化財課長）、高橋誠二（主幹：5月末まで）、松谷恵美子（会計年度任用職員）
5. 発掘調査作業及び測量は、株式会社トーワエンジニアリングに委託した。
6. 挿図中の北は、測量法に基づく平面直角第Ⅲ系のX軸方向を差し、座標系のXY座標は世界測地系による。レベル高は海拔高を示す。
7. 銀象嵌装大刀は、令和4年度に（公財）元興寺文化財研究所に委託し保存処理を行った。
8. 銀象嵌装大刀と鉄鏃の調査は、島根県古代文化センター吉松優希主任研究員に依頼し、第3章第3節（2）、第4章第2節に玉稿を賜った。また、人骨については、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム松下孝幸館長より所見を頂いた。
9. 本書に掲載した写真のうち、図版8～10は吉松主任研究員、図版11・12は（公財）元興寺文化財研究所の撮影によるものである。
10. 本書の執筆（第3章第3節（2）、第4章第2節以外）・編集は、角田・高橋が行った。
11. 本書掲載の遺物、図面・写真等は、雲南市歴史資料収蔵センターで保管している。

# 本文目次

## 第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

(1) 遺跡の立地	6
(2) 宇治西Ⅰ遺跡	6
(3) 宇治西Ⅱ遺跡	6

### 第2節 遺構

(1) 横穴墓	8
(2) 遺物の出土状況	8

### 第3節 遺物

(1) 須恵器	11
(2) 大刀・鉄鏃	14

## 第4章 まとめ

### 第1節 横穴墓

(1) 形態と年代	18
(2) 斐伊川中流域の後期古墳における位置づけ	18

### 第2節 象嵌装大刀

(1) 象嵌装大刀の年代的な位置づけ	20
(2) 島根県域における象嵌装大刀の位置づけ	23
(3) 象嵌装大刀からみた宇治西Ⅲ遺跡の被葬者像	24

## 挿 図 目 次

第1図	宇治西Ⅲ遺跡と周辺の遺跡	3
第2図	宇治西Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の位置	7
第3図	横穴墓実測図	9
第4図	横穴墓遺物出土状況実測図	10
第5図	横穴墓人骨出土状況実測図	11
第6図	横穴墓出土須恵器実測図	13
第7図	横穴墓出土大刀実測図	15
第8図	横穴墓出土刀装具実測図	16
第9図	横穴墓出土鉄鏃実測図	17
第10図	象嵌木芯頭椎大刀の類例	21
第11図	島根県内出土象嵌装大刀の変遷	23
第12図	出雲地域の装飾付大刀の分布	25

## 挿 表 目 次

第1表	須恵器観察表	12
第2表	鉄器観察表	17
第3表	雲南市の大刀・馬具等が出土した後期古墳	19
第4表	島根県内出土象嵌装大刀集成	22

# 写 真 図 版

- 写真図版1上 横穴墓不時発見時の状況（南から）  
写真図版1下 前庭部検出状況（南東から）  
写真図版2上 前庭部土層（東から）  
写真図版2下 玄室遺物出土状況（南から）  
写真図版3上 玄室遺物出土状況（南東から）  
写真図版3下 玄室遺物出土状況（東から）  
写真図版4上 玄室遺物出土状況（北から）  
写真図版4下 提瓶・甕出土状況（南から）  
写真図版5上 蓋坏出土状況（東から）  
写真図版5下 銀象嵌装大刀、人骨出土状況（東から）  
写真図版6上 人骨出土状況（西から）  
写真図版6下 前庭部完掘状況（南から）  
写真図版7 横穴墓完掘状況（北から）  
写真図版8上 出土須恵器  
写真図版8下 須恵器蓋坏  
写真図版9 須恵器蓋坏・高坏・甕・直口壺・平瓶  
写真図版10 須恵器提瓶・壺  
写真図版11 銀象嵌装大刀  
写真図版12上 銀象嵌装大刀  
写真図版12下 鉄鏃

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

松江自動車道に新設された加茂スマートインターチェンジの建設予定地については、平成29年度に市建設部都市計画課より文化財課に建設予定地内における埋蔵文化財の有無に関して照会があった。分布調査によって遺物を表面採集したことから、試掘調査を行ったところ宇治西Ⅰ遺跡、宇治西Ⅱ遺跡が確認された。両遺跡の取り扱いについては、事業主体である西日本高速道路株式会社中国支社など関係機関と協議を行ったが、事業計画の変更はできないとの結論に達し、同社の委託を受けて雲南市教育委員会が令和元年度に発掘調査を実施した。調査の結果、両遺跡では奈良～平安時代の掘立柱建物跡群をはじめ、当時の役人が使用した銅製の巡方が出土するなどの成果があった（雲南市教育委員会2021）。加茂スマートインターチェンジに伴う発掘調査は、これにより一旦は終了した。

ところが、令和3年4月27日に工事関係者より重機掘削中に埋蔵文化財を発見した旨、市文化財課に連絡があった。現地確認の結果、周囲の状況から横穴墓であることが判明し、これ以上の破壊が進まないよう工事関係者に周辺の掘削工事を一時中断するよう要請した。遺跡の不時発見を受けて、県教育庁文化財課と4月30日に協議を行い、発見した横穴墓以外にも複数基が存在する可能性も考えられたことから、試掘調査を行った。

## 第2節 調査の経過

試掘調査は、5月7日より20日まで実施した。調査の結果、残存する1基以外に横穴墓を確認することはできなかった。これを受けて、5月27日に西日本高速道路株式会社中国支社より文化財保護法第97条による遺跡発見の通知が提出された。横穴墓の発見地点は工事が進んでいたため工事計画の変更は困難であり、記録保存を前提にした発掘調査を実施することとした。そうしたところ、市建設部との協議により横穴墓が発見された地点は雲南市分の施工範囲であることが判明し、市を事業主体として発掘調査を実施した。

発掘調査は、6月24日より7月5日まで行った。発見時には、「玄室の床面がほぼ露呈し、アーチ形の奥壁部が僅かに残存する横穴墓」と考えていたが、調査の結果、「アーチ形の奥壁部」は天井部が崩落したものであり、床面は当初考えていたところより1m低いことが明らかになった。横穴墓は天井部が破壊されていたものの、床面は前庭部から玄室までほぼ残っており、玄室では須恵器蓋坏・甕・直口壺・壺・平瓶、大刀、鉄鏃のほか人骨も検出された。7月5日には、古代出雲歴史博物館の指導により、鉄器および人骨の取り上げを行った。出土した大刀については同博物館でX線撮影を実施した結果、象嵌装であることも確認された。

なお、現地調査の終了後、7月8日には県教育庁文化財課による現地指導を受けている。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

宇治西Ⅲ遺跡が所在する三代地区は、1889年（明治22）の町村制施行時には南加茂村・神原村・宇治村と合わせて神原村とされたところである。1934年（昭和9）には神原村は加茂村・屋裏村と合併して加茂町（加茂町1984）、2004年（平成16）の広域合併によって雲南市となり現在に至っている。

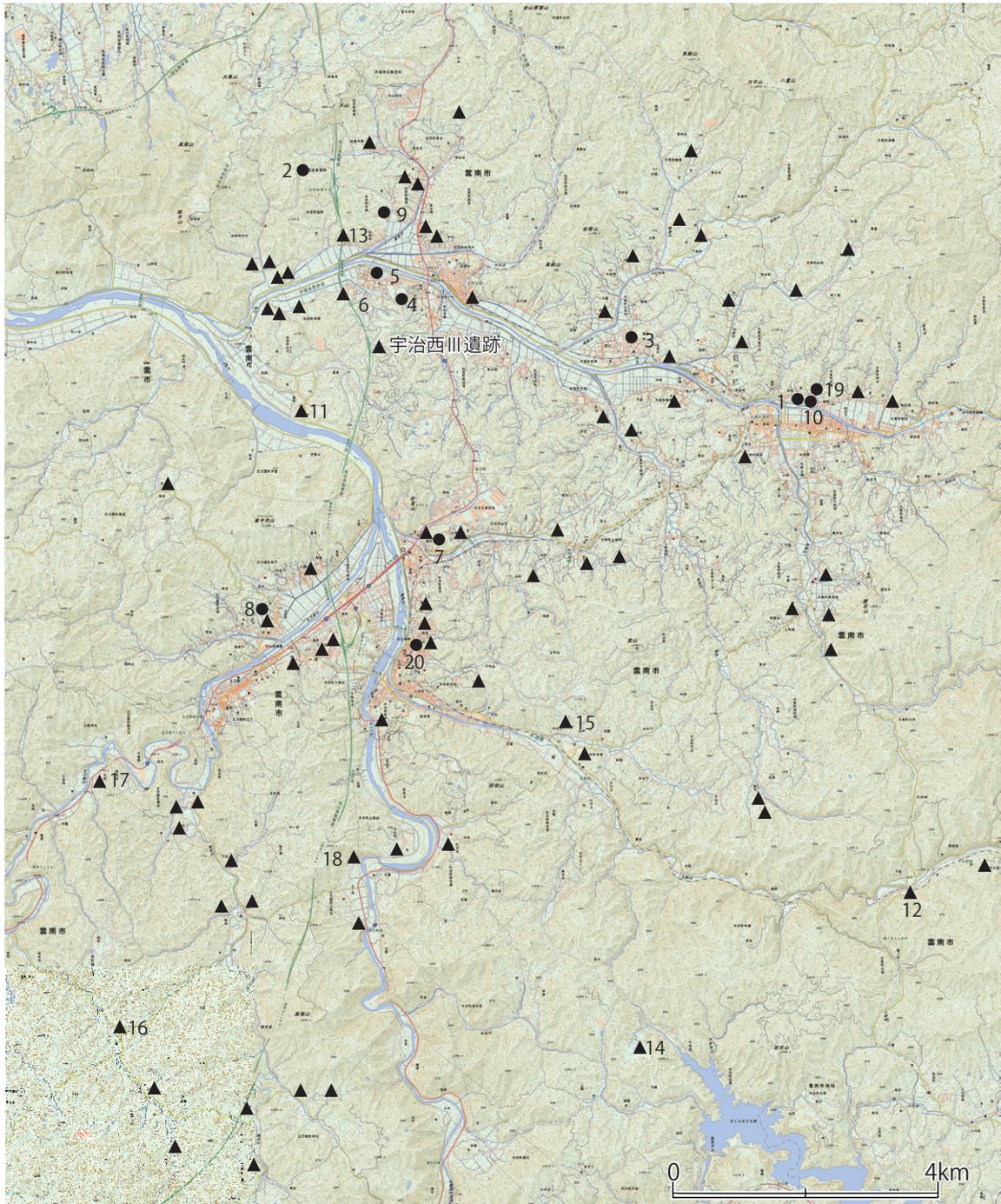
加茂町は東西6.4km・南北6.8kmほどの広さで、町の中央を斐伊川の支流である赤川が貫流する。町の北西部には高瀬山（標高280m）から岩倉大山（標高282.5m）へ200～250mほどの山々が連なり中起伏山地が形成されている。これに対し、南部や北東部には比較的緩やかな50～100mほどの丘陵地が広がっている。山や丘陵は赤川とその支流によって開析されることで谷底平野となっており、赤川流域を中心とした盆地状の景観が形成される（加茂町1984）。

### 第2節 歴史的環境

縄文時代の遺跡は、赤川流域においては角田遺跡（大東町）が知られる。磨消縄文の浅鉢や深鉢など後期の土器や晩期の粗製深鉢、突帯文土器などがある（大東町教育委員会1988）。加茂町内の状況は明らかでないが、神原企業団地造成工事に伴い発掘調査した池尻遺跡で縄文土器片が出土しており存在が予想される。

現在のところ様相が判明しているのは、弥生時代以降の遺跡である。加茂岩倉遺跡は、1ヶ所の出土数としては全国最多の39個もの銅鐸が出土したことで知られる。銅鐸は、外縁付鈕1式から扁平鈕2式～突線鈕1式段階のもので、弥生時代中期末頃に埋納されたものとみられる（加茂町教育委員会・鳥根県教育委員会2002）。この時期の集落遺跡としては、郡垣遺跡（大東町）がある。弥生時代中期の竪穴住居跡のほか、中期の土器が多量に検出されており、シカを描いたとみられる絵画土器も含まれる（雲南市教育委員会2010・2011・2014）。

弥生時代後期から古墳時代にかけては、墳墓の様相が明らかになっており、赤川流域では神原正面北遺跡、神原神社古墳、土井・砂遺跡などが知られる。神原正面遺跡C区では弥生時代後期の円形台状墓1基と方形台状墓3基が確認された。円形台状墓は径25mで、上面には多数の土壙があり箱形木棺をもつものもある。方形台状墓は、尾根を切断して削り出し、それぞれ2～4基の埋葬施設をもち、箱形石棺も確認された。E区には大小10基の方墳があった。これらは一辺6～10m前後のもので2～4基の埋葬施設をもち、箱形木棺もみられる（加茂町1984）。神原神社古墳は、出雲地方でも最古級の前期古墳として知られる。一辺30m・高さ7mほどの方墳で、割竹形木棺を置いた狭長な竪穴式石室を埋葬施設とする。景初三年銘三角縁神獸鏡をはじめ素環頭大刀・鉄剣・鉄鎌・鉄鎌・鉄斧などの鉄器が副葬されていた（加茂町教育委員会2002）。土井・砂遺跡では、方墳6基・土器棺1基・土器蓋石棺墓1基が調査された。このうち1号墳は一辺10mの方墳で2基の埋葬施設をもち、第2主体部の



1. 角田遺跡 2. 加茂岩倉遺跡 3. 郡垣遺跡 4. 神原正面北遺跡 5. 神原神社古墳 6. 土井・砂遺跡 7. 斐伊中山古墳群 8. 松本古墳群  
 9. 大原元宮遺跡 10. 大東高校グラウンド遺跡 11. 三代古墳 12. 寺谷尻古墳 13. 湯後横穴墓群 14. 下布施横穴墓群 15. 平ヶ廻横穴墓  
 16. 東下谷横穴墓群 17. 太田横穴墓群 18. 岩広古墳 19. 又下遺跡 20. 斐伊郷新造院跡 ▲後期古墳 ●後期古墳以外

第1図 宇治西川遺跡と周辺の遺跡

割竹形木棺北側では破碎された内行花文鏡が出土している（島根県教育委員会2001）。

古墳時代前期の古墳は、斐伊川本流域・三刀屋川流域にも顕著なものがあり、斐伊中山古墳群・松本古墳群が明らかである。斐伊中山古墳群（木次町）は、丘陵上に営まれた16基の古墳よりなり、7基が調査されている。このうち、2号墳第Ⅳ主体は粘土床に割竹形木棺を置き、墓壙には排水溝が接

続しており、鳥文鏡と刀子が出土した（木次町教育委員会1993）。松本古墳群（三刀屋町）は、古墳時代前期に継起的に造られた前方後方墳2基を中心とする。1号墳は全長50m、3号墳は全長52mで、発掘調査が行われた1号墳では粘土槨2基が確認されており、獸帯鏡・鉄剣・刀子などが出土した（鳥根県教育委員会1963）。3号墳は未発掘であるが、前方部がバチ形に開く形態から1号墳に先行する可能性が指摘される（出雲考古学研究会1991）。

古墳時代中期の古墳は不明な点が多いが、大崎元宮遺跡には径10m程の円墳3基があり、古式の須恵器蓋坏が出土している（加茂町教育委員会2004）。大東高校グラウンド遺跡では、古墳時代中期の土師器甕・壺・高坏のほか、碧玉などが出土した。碧玉勾玉・管玉の未製品が含まれ、玉作遺跡として知られている（大東町教育委員会1988）。

古墳時代後期になると、三代古墳・寺谷尻古墳など横穴式石室をもつ古墳が少数造られるのをはじめ、横穴墓が多数確認されている。このうち三代古墳は、径10mほどの円墳で横穴式石室をもち、金銅装双龍環頭大刀・鉄斧・須恵器が出土した（加茂町1984）。双龍環頭大刀は畿内政権の工房で量産されたものとみられ、被葬者は出雲地方の最高首長を介して大刀を入手した小首長との指摘がある（西尾・坂本・稲田・松尾2007）。寺谷尻古墳（大東町）も径10mほどの円墳で横穴式石室をもち、円頭大刀・雲珠・鎌・刀子・須恵器が出土した（大東町教育委員会1996）。円頭大刀は鉄製であるが、装飾付大刀に準ずるものであり、雲珠は金銅装であることから大原郡、仁多郡域の首長墓の副葬品の中でも傑出したものと評価されている（西尾・坂本・稲田・松尾2007）。

横穴墓は、赤川流域でも多数確認されている。横穴墓の形態は、玄室の平面形が縦長長方形、横断面形が三角形で妻入りとなるものが多い。このうち、湯後横穴墓群は8基が発掘され、2号穴と4号穴には組合せ式の家形石棺・箱形石棺が納められていた。4号穴からは、大刀・鉄鎌・刀子などの鉄器も出土している（鳥根県教育委員会2001）。横穴墓に装飾付大刀・刀子が副葬されたものとしては、下布施横穴墓群（木次町）、平ヶ廻横穴墓（木次町）、東下谷横穴墓群（三刀屋町）がある。下布施1号横穴墓出土の装飾付大刀は、柄間に植物性繊維の紐を巻き柄縁に金銀装・鑿打ちによる細かな装飾を加えたものである（木次町教育委員会2002）。平ヶ廻横穴墓の金銅装刀子は、刀身にも鍍金され刃をもたない祭器であり、出土例が稀な優品である。東下谷4号穴には、大形で喰出鐔をもち柄に紐状の有機物を螺旋状に二重巻きにする大刀と、銅製装具を多用する大刀があり、ともに黒漆塗りである（西尾・坂本・稲田・松尾2007）。これらは、畿内政権の工房で生産された金銅装の装飾付大刀には及ばないが、一定の装飾性をもつ優れた大刀であり、横穴墓の被葬者に小首長層が含まれていたことを窺わせる。

奈良時代の三代地区は、『出雲国風土記』によれば大原郡屋代郷に比定される。『風土記』は「大原郡」という郡名について「郡家の正西一十里一百一十六歩に、田一十町許あり。平原なれば号けて大原と曰う。往古之時、此処に郡家有りき。今も猶旧に追ひて大原と号く」と伝える（鳥根県古代文化センター編2023）。この記事は、郡家の移転を示すものとして良く知られているが、この旧郡家とみられるのが郡垣遺跡である。巨大な掘立柱建物跡（長舎）が一辺約45mの「コ」字形に配置されていることが明らかになっているほか、建物の主軸が斜め方位であることなどから、7世紀末～8世紀初

頭に造営された郡家と推定されている。また、これと同じ建物方位をとりながらも重複せずに造営された総柱建物跡や礎石建物跡は、8世紀中葉以降の郡衙正倉の可能性が考えられる（雲南市教育委員会2014）。『風土記』編纂当時の郡家は、「兎原野」の項に「郡家の正東なり。即ち郡家に属けり。」とあることから、木次町里方の兎原付近にあったと考えられるが、遺跡としては不明である。

『風土記』所載の寺院は、大原郡には斐伊郷に2ヶ所、屋裏郷に1ヶ所の「新造院」が記載される。このうち、斐伊郷新造院跡（木次町）はJR木次線付近に礎石が残っているほか、布目瓦が出土した馬田寺遺跡（大東町）は屋裏郷新造院の可能性がある。

奈良時代の集落遺跡は、宇治西Ⅱ遺跡で斜面を造成して設けた平坦面に営まれた掘立柱建物跡3棟以上が明らかになっており、黒漆塗りの銅製巡方が確認されている（雲南市教育委員会2021）。また、又下遺跡（大東町）では須恵器坏・壺・土製支脚のほか、分銅状石製品が出土している（大東町教育委員会1988）。

#### 参考文献

- 出雲考古学研究会1991「松本古墳群」『古代の出雲を考える』7
- 雲南市教育委員会2010『郡垣遺跡Ⅰ』
- 雲南市教育委員会2011『郡垣遺跡Ⅱ』
- 雲南市教育委員会2014『郡垣遺跡Ⅲ』
- 雲南市教育委員会2021『宇治西Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡』
- 加茂町1984『加茂町誌』
- 加茂町教育委員会2002『神原神社古墳』
- 加茂町教育委員会2004『大崎元宮遺跡発掘調査報告書』
- 木次町教育委員会1993『斐伊中山古墳群－西支群－』
- 木次町教育委員会2002『下布施横穴墓群・案久寺遺跡』
- 島根県教育委員会1963『松本古墳調査報告』
- 島根県教育委員会2001『湯の奥遺跡、登安寺遺跡、湯後遺跡、土井・砂遺跡』
- 島根県教育委員会・加茂町教育委員会2002『加茂岩倉遺跡』
- 島根県古代文化センター編2023『出雲国風土記－校訂・注釈編－』
- 大東町教育委員会1988『角田遺跡・又下遺跡 付大東高校グラウンド遺跡他資料』
- 大東町教育委員会1996『寺谷尻古墳・段たたら跡』
- 西尾克己・坂本諭司・稲田 信・松尾充晶2007『斐伊川中流域における後期古墳の様相』
- 三刀屋町教育委員会1984『東下谷横穴墓群発掘調査報告書』

# 第3章 調査の成果

## 第1節 遺跡の概要

### (1) 遺跡の立地

宇治西Ⅰ遺跡と宇治西Ⅱ遺跡は、平成29年度に実施した試掘調査によって確認された。遺跡は、斐伊川本流と赤川の合流地点付近に流れ出る奥田川を2kmほど遡った標高80～90mほどの丘陵地の南斜面に立地する。丘陵は、東から西へ緩やかに傾斜しながら延び、その中ほどの標高60mの地点に宇治西Ⅰ遺跡がある。丘陵は現在では松江自動車道により分断されているが、原地形はさらに西へと続き、宇治西Ⅱ遺跡の西200mの丘陵先端部、標高56m前後の地点に宇治西Ⅱ遺跡がある（第2図）。

宇治西Ⅲ遺跡は、宇治西Ⅰ遺跡より東へ130mのところの位置する。標高80mほどの地点で確認されているが、造成工事中の発見であったため、周辺地形などの状況は不明な点が多い。地形図からすれば、丘陵頂部近くよりやや下がったところにあり、谷部からの比高は30m程度であったとみられる。工事前は葡萄畑であったとされ、地形改変をかなり受けていた。

宇治西Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の北側にある丘陵には池尻遺跡が所在する。平成26・27年度に神原企業団地造成工事、平成30・令和元年度に市道神原企業団地線新設工事に伴い雲南市教育委員会が発掘調査している。調査の結果、古墳時代後期から平安時代初めにかけての掘立柱建物跡をはじめ、横穴墓3基などが明らかになった。

### (2) 宇治西Ⅰ遺跡

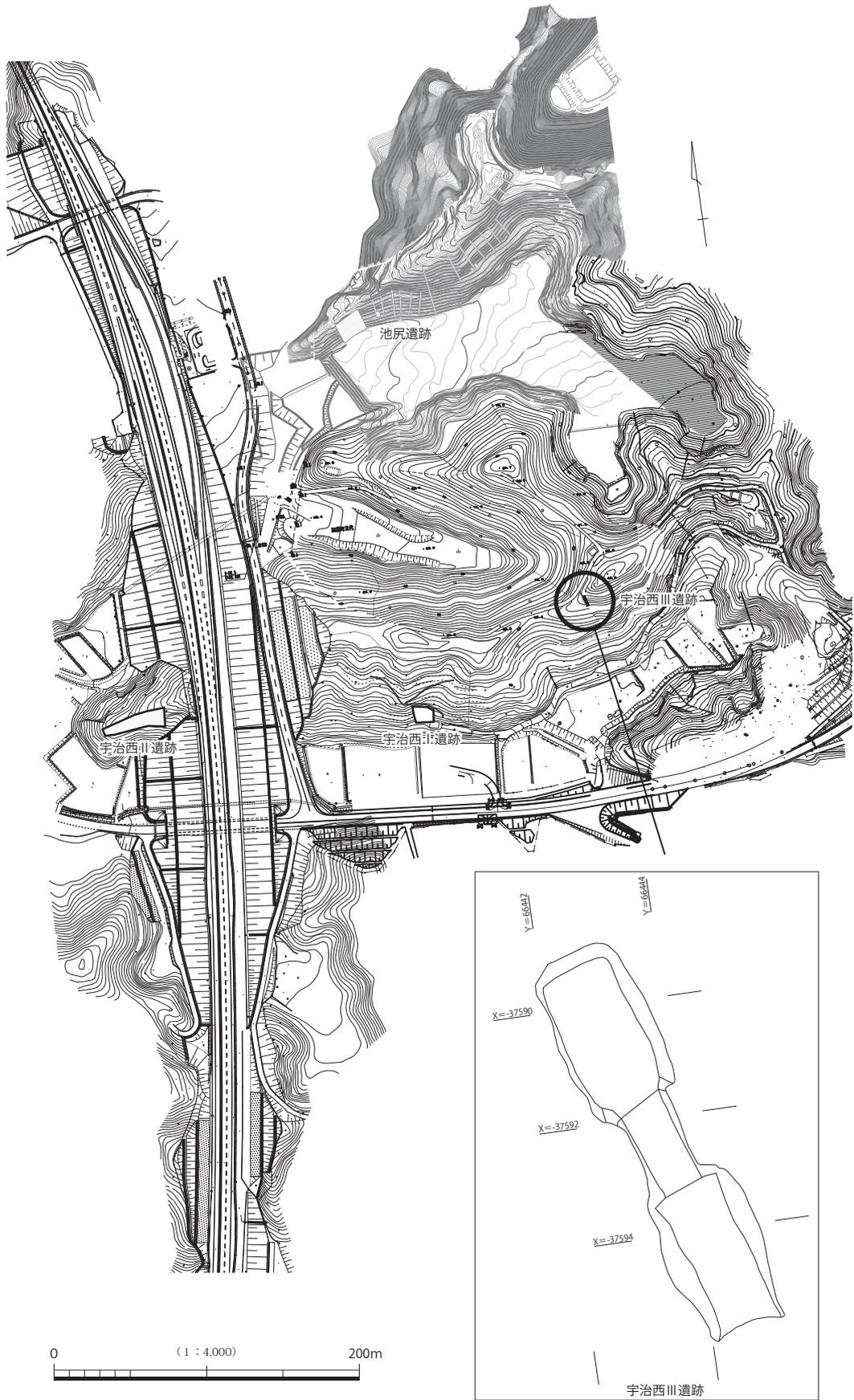
検出された遺構は、斜面を切削して造り出した加工段に営まれた柱列と溝などがある。加工段は長さ11m以上・幅2.1～2.3mで、柱穴が4つ並んでおり、掘立柱建物跡とみられる。

出土遺物には、土器器甕・坏・高台付坏、須恵器坏などがあり、奈良時代から平安時代初めにかけてのものと考えられる（雲南市教育委員会2021）。

### (3) 宇治西Ⅱ遺跡

検出された遺構は、加工段に営まれた掘立柱建物跡3棟・壁溝4本・焼成土坑2基・土器溜まりなどがある。加工段は長さ36m以上・幅2.1～4mの広さがあり、西から掘立柱建物跡1から3の順に並ぶ。建物の規模は、掘立柱建物跡1・2が3間×1間、掘立柱建物跡3が2間×1間である。掘立柱建物跡2と3は切合関係があり、掘立柱建物跡3→2の順であった。焼成土坑は、楕円形または隅丸方形で、壁面が被熱し内部で炭化物が多量に検出されており、放射性炭素年代は8～9世紀後半という結果が得られている。土器溜まりでは、須恵器甕・壺・直口壺・長頸壺・坏・高台付坏が出土した。時期は奈良時代から平安時代初めにかけてのものと考えられる。

なお、遺構外ではあるが、銅製巡方とその裏金具が検出されている。巡方は、脚鉾を4本もち、表面には黒漆がみられ、裏金具はこれに伴うものであろう。検出された掘立柱建物跡の居住者に官人がいたことを思わせる遺物である（雲南市教育委員会2021）。



第2図 宇治西I・II・III遺跡の位置

## 第2節 遺構

### (1) 横穴墓

横穴墓の発見時には、「玄室の床面がほぼ露呈し、アーチ形の奥壁部が僅かに残存する」と考えていた。発掘調査を進めたところ、「アーチ形の奥壁部」は天井部が崩落したものであり、天井部は残存していないことがわかった。床面は当初考えていたところより1mほど低い位置にあったが、奥壁・側壁が調査時に崩落する可能性があったため、重機で危険のない高さまで掘り下げた。

横穴墓は全長6.5mで、玄室・羨道・前庭部よりなり、S20°Eに開口する(第3図)。玄室は、平面形が縦長長方形、隅部はやや丸みを帯び、羨道が前壁の中央に接続する両袖式で、長さ2.5m・奥壁幅1.2m・前壁幅1.1mである。奥壁より20cmほどのところには、石が並んで2つ置かれていた。例えば、枕あるいは棺台の可能性も想定されるが、後述のように被葬者の頭位は南向きとみられ、木棺の使用を示す鉄釘も未検出であるので、用途は判然としない。羨道は、床面が玄室とほぼ同じ高さ、前庭部とは10cmほどの段をもち、長さ1.5m・幅0.7mである。前庭部は、長さ2.6m、幅は羨道側1.15m・開口部1mほどで、床面は開口部に向かって傾斜する。

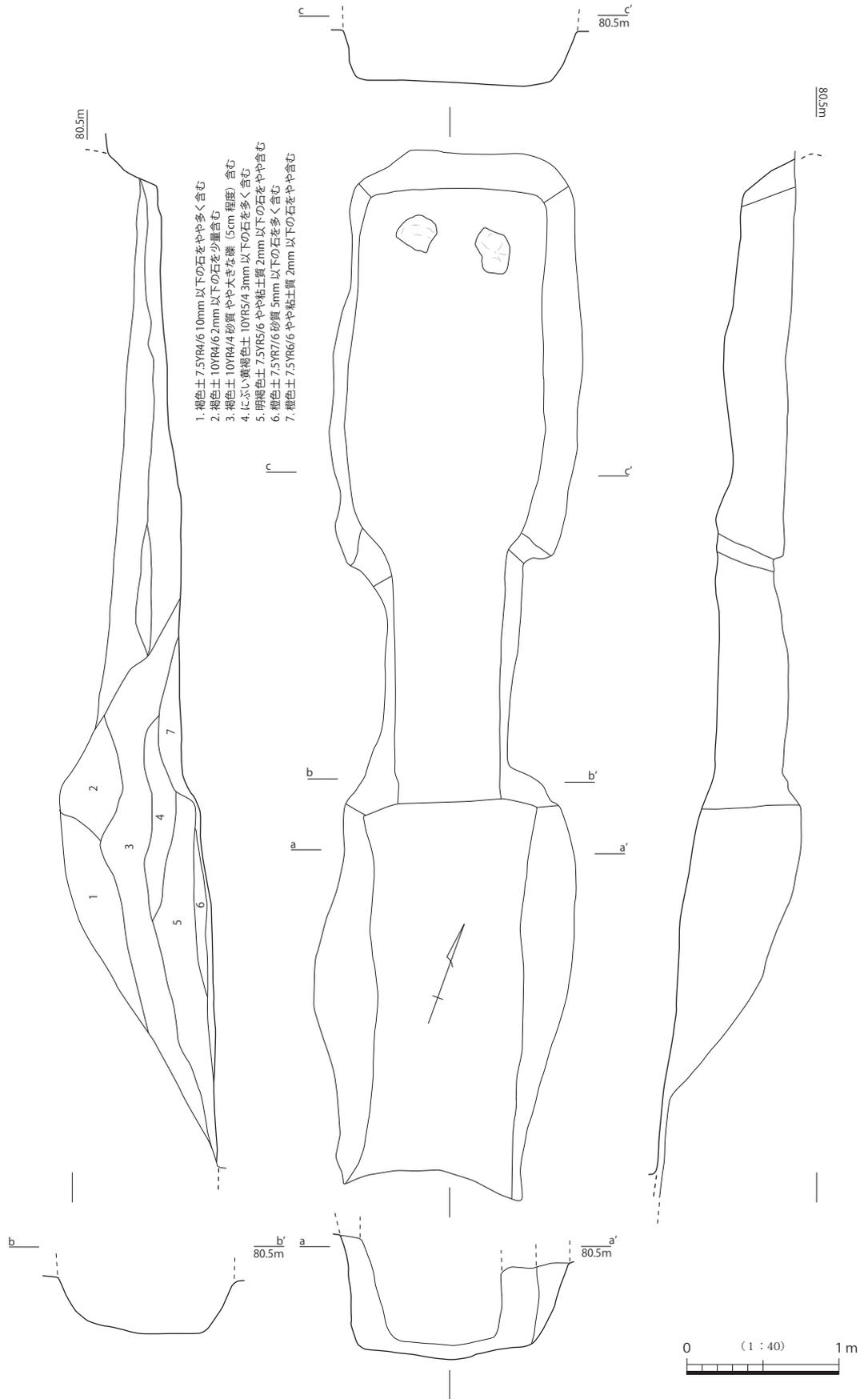
土層の状況は、羨道部に玄室の閉塞に使われたとみられる盛土(1~7層)がある。上層より、1層 褐色土(7.5YR4/6)・2層 褐色土(10YR4/6)・3層 褐色土(10YR4/4)・4層 におい黄褐色土(10YR5/4)・5層 明褐色土(7.5YR5/6)・6層 橙色土(7.5YR7/6)・7層 橙色土(7.5YR6/6)となる。いずれも褐色土~橙色土系で、有機物を含む堆積土ではないことから、閉塞に使われた土である。2次的に掘り返した痕跡はなく、追葬はなかったものと考えられる。玄室内には、崩落土とみられる土砂が溜まっていた。

### (2) 遺物の出土状況

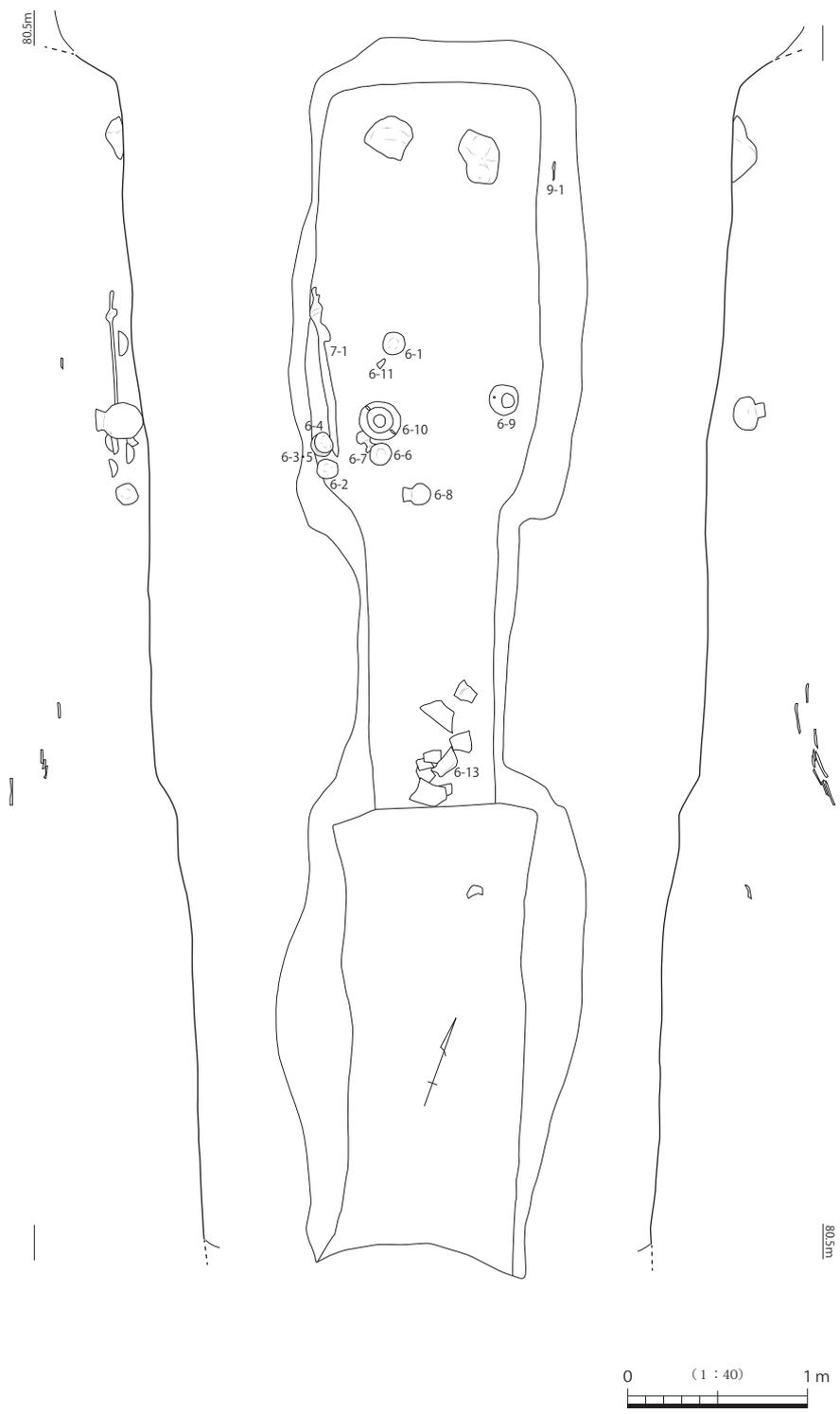
遺物には、大刀・鉄鏃のほか須恵器があり、玄室を中心に羨道でも検出された(第4図・第5図)。玄室の西側壁、前壁寄り付近には大刀(第7図)が切先を羨道方向に向けて置かれていたが、鞆尻金具(第8図3)のみは前庭部で出土している。大刀と西側壁の間には須恵器蓋坏(第6図2~5)、大刀の東側では提瓶(同図10)・甕(同図7)・高坏(同図6)・直口壺(同図8)・蓋坏(同図1)・壺片(同図11)、東側壁側では平瓶(同図9)が検出された。このうち、提瓶と平瓶は口縁を上にしており、甕と直口壺は横に倒れた状態であった。奥壁寄りの東側壁付近では、鉄鏃(第9図1)も出土した。

玄室西側壁寄りでは、人骨がまとまって確認された<sup>(1)</sup>。大刀が傍らにあり、提瓶・甕・蓋坏なども周囲に置かれている。人骨はいずれも小片であるが、下顎骨あるいは上顎骨とみられる部位があり歯が付く。人骨に大きな移動がないとすれば、これが埋葬時の頭位を示すものと考えられ、その場合、被葬者は頭を南に向けていたこととなる。

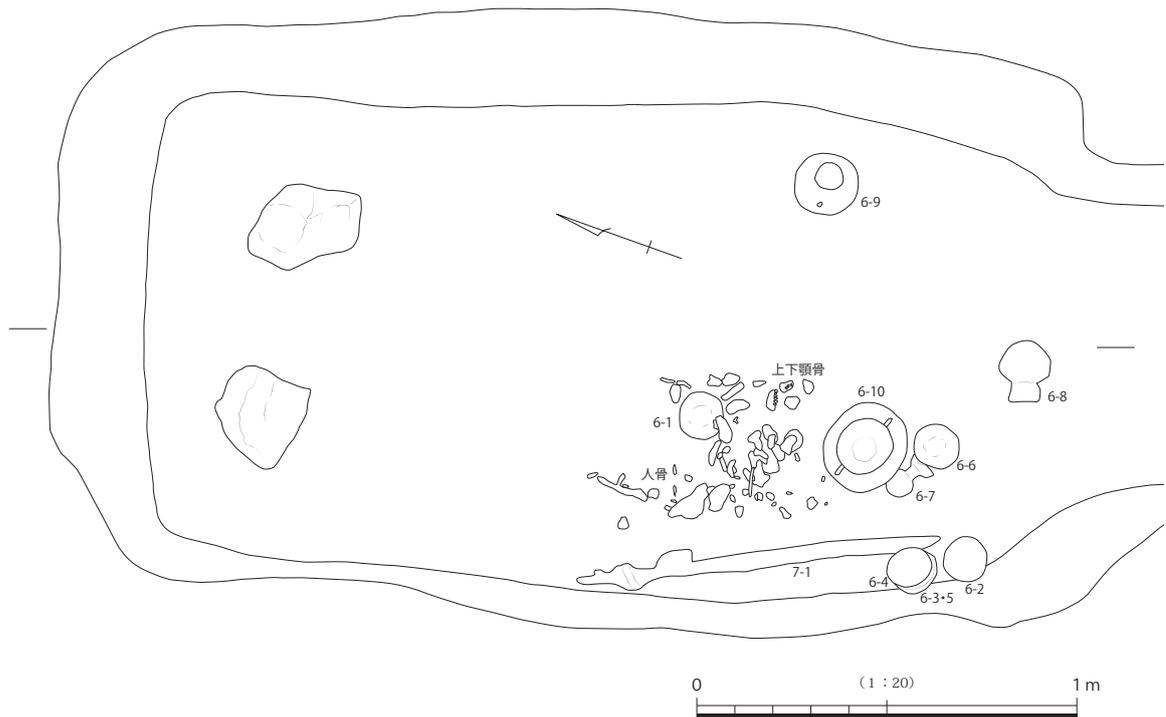
羨道では、大形の須恵器壺片(第6図12・13)が出土した。羨門付近にまとまっており、床面より50~60cm高い位置で、玄室に向かい低くなるよう検出されている。おそらく、玄室の閉塞に使われた盛土の上に壺を破碎して置いたものとみられ、横穴墓の閉塞に伴う祭祀に使われたことが想定される。



第3図 横穴墓実測図



第4図 横穴墓遺物出土状況実測図



第5図 横穴墓人骨出土状況実測図

### 第3節 遺物

#### (1) 須恵器

須恵器には、蓋坏・高坏・甗・直口壺・平瓶・提瓶・壺がある（第6図）。

蓋坏は、出土状況から坏蓋（第6図4）と坏身（5）が組み合うことがわかるが、坏蓋（第6図1～3）は坏身を伴わない。坏蓋（第6図1～4）は、いずれも口径が11.9～13.0cmと小さく、器高も3.9～4.4cmと低い。口縁から頂部に向かい丸みを帯びた器形をもつ。頂部外面にはヘラ起こし痕を残し、1は粗くナデ調整する。口縁内外面は回転ナデで、頂部内面にはナデがある。坏蓋（第6図4）には頂部外面に「×」印のヘラ記号がある。坏身（第6図5）は、口径が11.0cm、器高3.6cmと、やはり小形である。口縁には短いかえりがあり、底部は丸みを帯びる。口縁内外面は回転ナデで、底部にはヘラ起こし痕が残る。外面には灰をかぶる。

高坏（第6図6）は、脚部を欠き、坏部のみ残る。坏部は口縁が外傾し、稜をもつ。坏部下面には、脚部透し穴の痕跡があり、長方形透かしが2方向に入っていたことがわかる。口縁内外面は、回転ナデ、坏部内面底にはナデがある。焼成時に外面は灰をかぶり、光沢がある。

甗（第6図7）は、口径8.7cm・器高11.0cmと小さい。ラップ状に開く口縁と平底気味の体部をもち、頸部に1条、肩部に2条の沈線が入るが、波状文などの文様はみられない。口縁内外面は回転ナデ、底部外面は手持ちケズリである。

直口壺（第6図8）は、やや外傾する口縁と肩の張る体部をもち、底部は平底である。口径は8.8～9.5cmとゆがみがある。口縁内外面から体部上半は回転ナデ、体部下半は回転ヘラケズリで、回転方向は右回りである。

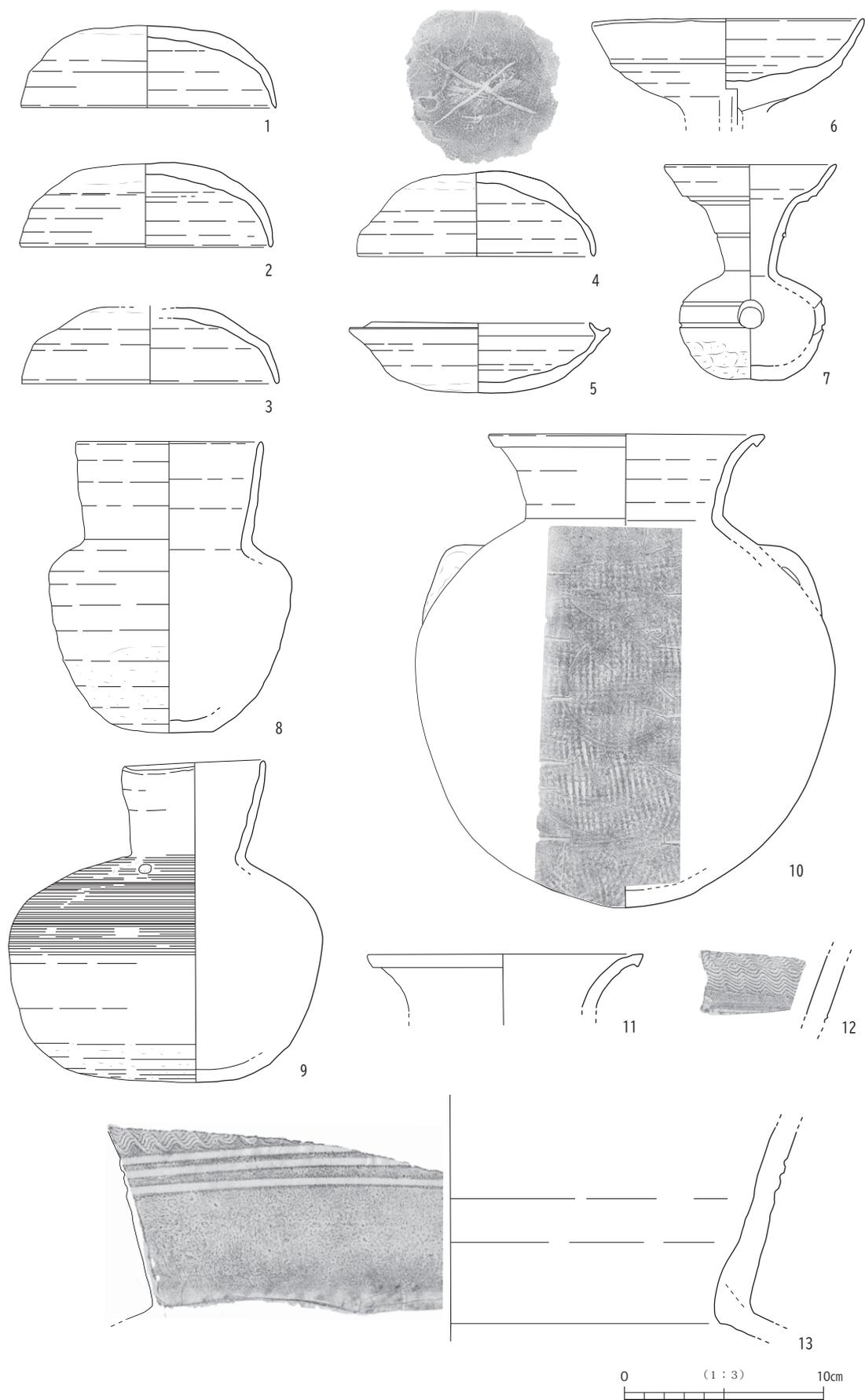
平瓶（第6図9）は、丸みを帯びた体部の中心より少しずれた位置に、やや外傾する口縁がつく。体部を正円に成形後、口縁を中心よりずらして接合することから、内面には擬口縁を塞ぐための粘土充填痕が段として残る。肩部外面はカキメ調整をした後、把手の痕跡である円形の粘土が貼り付けられており、底部にはヘラ記号がみられる。口縁内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリで、回転方向は右回りである。外面には黒色ガラス質の付着物があり、一部に光沢のある自然釉がかかる。

提瓶（第6図10）は、上面観が正円で、器形は壺として成形されたものであるが、肩部に把手が付くなど、提瓶の特徴をもつ。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部に縁をもち、回転ナデである。体部はやや肩部が張り、丸底である。外面は平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕がある。タタキ調整の後、体部側面を中心に粗いカキメが入っており、提瓶を意識する。肩部の把手は体部との間にほとんど隙間がなく、形のみ模したものとなる。焼成時に、肩部・頸部の一部に灰をかぶる。

壺（第6図11）は、復原口径14.0cmと小形である。外反する口縁で、端部に縁をもち、壺（第6図13）は、復原頸部径30.4cmと大形で、第6図12はその一部である。同一個体とみられる体部片も出土しているが、壺全体がそろそろほどの破片数はない。頸部は外面に沈線が3条入っており、その上に波状文が施文される。口縁の調整は横ナデ、体部は外面に平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕がみられる。

第1表 須恵器観察表

挿図番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	調整等	胎土	焼成	色調	備考
図5-1	坏蓋	12.8	4.2	頂部：粗いナデ 口縁：回転ナデ	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	
2	坏蓋	12.6	4.3	頂部：ヘラ起こし後、粗いナデ 口縁：回転ナデ	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色 (一部青灰色)	
3	坏蓋	13.0	3.9	頂部：ヘラ起こし痕 口縁：回転ナデ	3mm大の石英含む	良好	青灰色	
4	坏蓋	11.9	4.4	頂部：ヘラ起こし痕 口縁：回転ナデ	3mm大の砂粒含む	良好	青灰色	頂部に「×」のヘラ記号
5	坏身	11.0	3.6	口縁：回転ナデ 底部：ヘラ起こし痕	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	外面に灰をかぶる
6	高坏	13.8	4.9+	口縁：回転ナデ	4mm大の石英含む	良好	暗青灰色	外面に灰をかぶり、光沢あり
7	甕	8.7	11.0	口縁：回転ナデ 底部：手持ちケズリ	微砂含む	良好	青灰色	
8	直口壺	8.8~9.5	14.8	口縁：回転ナデ 底部：回転ヘラケズリ	5mm大までの石英含む	良好	暗青灰色	回転方向は右回り
9	平瓶	6.5~7.4	16.4	口縁：回転ナデ 肩部：カキメ 底部：回転ヘラケズリ	4mm大までの砂粒含む	良好	青灰色	回転方向は右回り 外面に黒色ガラス質の付着物 光沢のある自然釉 底部にヘラ記号
10	提瓶	13.8	24.3	口縁：回転ナデ 体部外面：タタキ後、粗いカキメ 体部内面：同心円当て具痕	僅かに微砂含む	良好	青灰色~ 暗青灰色	肩部・頸部の一部に灰かぶり
11	壺	14.0		口縁：回転ナデ	2mm大の石英含む	良好	暗青灰色	
12	壺			頸部：横ナデ	微砂含む	良好	暗青灰色	
13	壺			頸部：横ナデ 体部内面：同心円当て具痕	微砂含む	良好	暗青灰色	



第6図 横穴墓出土須恵器実測図

## (2) 大刀・鉄鍬

大刀（第7図）と鉄鍬（第9図1～5）がある。大刀には切羽縁金具、柄縁責金具、鐔、鍬、鞘尻金具が伴い、いずれも銀象嵌が施されている（第8図）。柄頭は失われているが、装具の組合せから象嵌木芯頭椎大刀であると考えられる。

大刀の刀身本体は全長93.4cmで、茎長15.3cm、茎幅厚さ0.4～0.7cm、刃部長78.1cm、刃幅3.0cm、厚さ0.9～1.0cmである。鍬はみられず平造である。切先はフクラ切先である。肉眼、X線画像でも判然としないが関部は不均等両関と思われる。茎尻はやや先端が斜めの一文字尻である。刃部には木質が残存しており、鞘入りで副葬されていたと考えられる。柄間には木質が残存し、柄木の上に糸巻きを施している。糸の幅は0.1cm前後である。糸巻き後には漆を塗って固定している可能性がある。また、X線画像を見ると、茎部には2つの目釘と2つの未使用の目釘孔がみられる。柄木の構造は糸巻きにより判然としないが、落とし込みの可能性が考えられる。

切羽縁金具（第8図1）は側面に半円文の銀象嵌が全周して施される。象嵌の多くは欠損しており、タガネ溝のみが見える部分が多い。溝の形状はU字形と考えられる。内部には柄木が残存し、茎側には柄木上に糸巻きも残存する。糸巻き部分の内部には棟側と側面2ヶ所の計3ヶ所に突起がみられ、糸巻きと柄木を固定するためのものであると思われる。外径5.2cm×4.2cm、内径4.1cm×3.2cm、厚さ0.6cmで形状は楕円形を呈する。

柄縁責金具（第8図2）は側面に半円文が全周して施される。外径4.0cm×2.6cm、厚さ0.2cmで形状は倒卵形を呈する。

鐔（第8図2）は無窓鐔で平部分に心葉文、耳部分に二重半円文が交互に施される。心葉文は柄側、刃部側両面ともに6単位が確認できる。心葉文の中は1～4本の弧線・直線が入る。周囲は弧線・直線で埋めている。耳部分の二重半円文で占められるが、一部に半円文もみられる。外径6.9cm×5.7cm、厚さ0.4cm前後である。形状は楕円形を呈し、柄縁責金具とは形状を異にする。

鍬（第8図2）は心葉文の象嵌が施される。堰板のある鍬で、その部分にも二重の直線文が施される。心葉文は鍬を全周し、4単位が認められる。心葉文の内部は2～3本の弧線・直線が入る。周囲は弧線・直線で埋めている。鐔の平面に施された象嵌と同様の文様構成である。長さ1.6cm、外径3.3cm×2.2cm、厚さ0.2cmである。

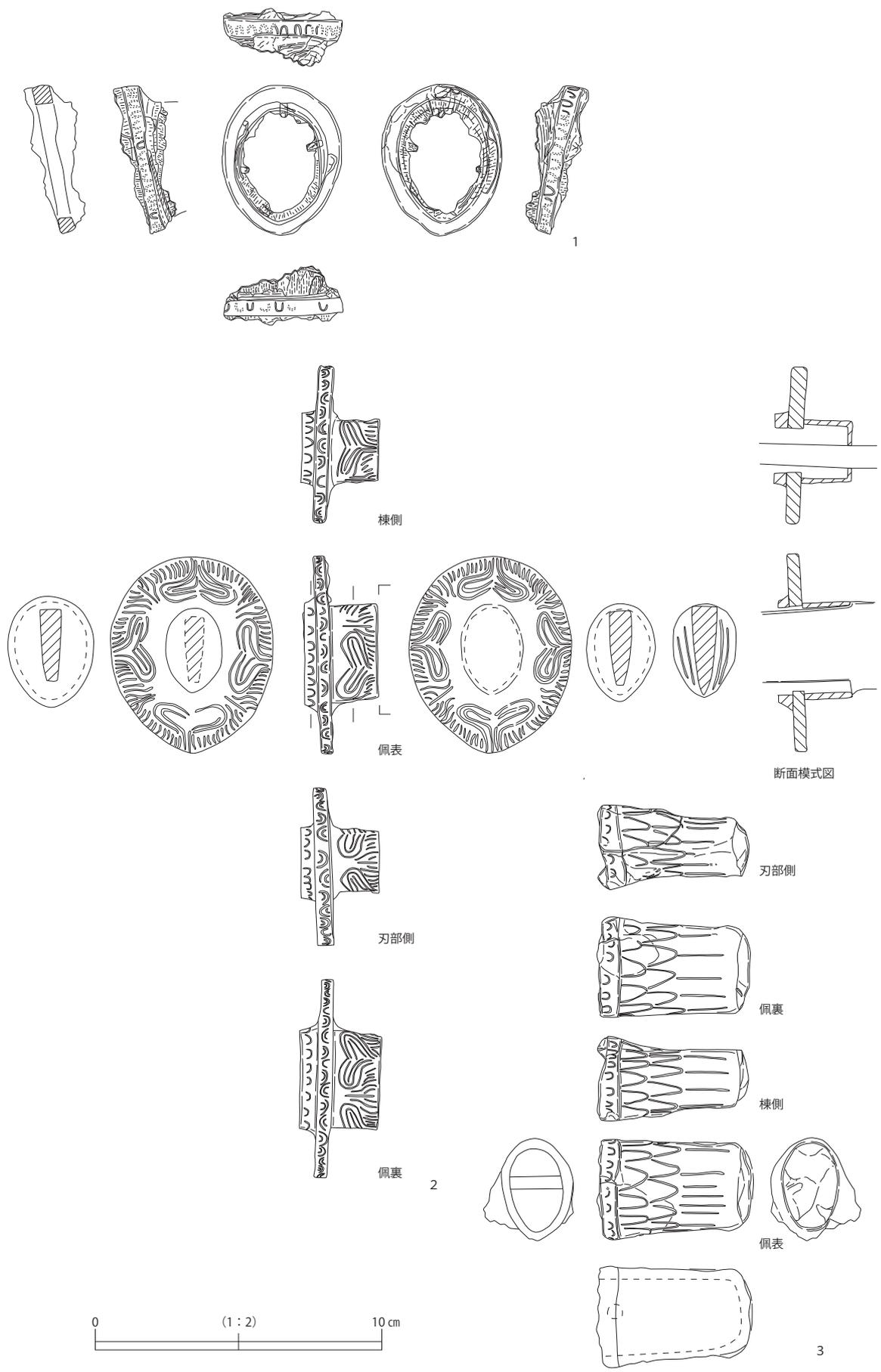
鞘尻金具（第8図3）は羽状文、責金具部分は半円文の象嵌が施される。羽状文は2段の山形文と直線文で構成される。長さ5.4cm、外径3.6cm×2.5cm、内径2.8cm×1.8cm、厚さ0.4cmである。内部に目釘がみられる。1～3の象嵌の銀線の幅はいずれも0.5mm程度である。

鉄鍬は5点出土している。形状のわかるもの4点はいずれも短頸鍬である。短頸ナデ関柳葉形鉄鍬（第9図1）は出土鉄鍬中最も大形のもので、長さ14.3cm、鍬身部長6.7cm、頸部長2.8cm（推定）、茎部長4.8cm、鍬身部の最大幅は2.65cmである。断面形態は片丸造である。頸部～茎部に木質、樹皮巻きがみられる。頸部関の形態は台形関と考えられる。

短頸ナデ関柳葉形鉄鍬（第9図2）は、残存長4.5cm、残存鍬身部長3.5cm、残存頸部長1.0cmである。鍬身部断面形態は両丸造で、頸部関の形態は不明である。



第7图 横穴墓出土大刀实测图

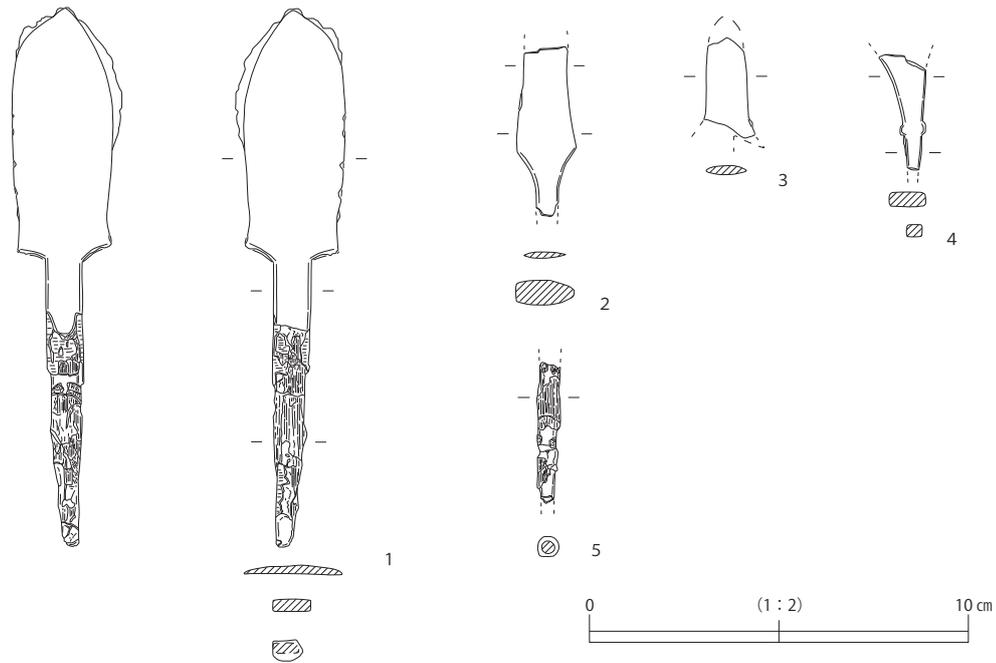


第 8 图 横穴墓出土刀装具实测图

短頸腸袂柳葉形鉄鎌（第9図3）は残存長2.6cmで鎌身部よりも下半の状況は不明である。鎌身部断面形態は両丸造である。

有茎方頭形鉄鎌（第9図4）と考えられる破片は、残存長3.1cm、残存鎌身部長1.9cm、残存茎部長1.2cmである。鎌身部下半～茎部の一部が残存するのみで鎌身部先端形状などは不明である。

鎌身部の形状は不明であるが、茎部（第9図5）がある。残存長3.2cmで木質と樹皮巻き痕跡がみられる。断面形状は円形である。



第9図 横穴墓出土鉄鎌実測図

第2表 鉄器観察表

挿図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備考
第7図	大刀	93.4	3	1	柄間糸巻、鞘木・柄木残存
第8図 1	切羽縁金具	5.2	4.2	0.6	半円文象嵌
第8図 2	柄縁責金具	4	2.6	0.2	半円文象嵌
第8図 2	鐔	6.9	5.7	0.4	無窓鐔 平：心葉文 耳：二重半円文
第8図 2	釧	1.6	3.3	0.2	心葉文、直線文象嵌
第8図 3	鞘尻金具	5.4	3.6	0.4	羽状文、半円文象嵌
第9図 1	鉄鎌	14.3	2.65	0.2	
第9図 2	鉄鎌	4.5	1.55	0.3	
第9図 3	鉄鎌	2.6	1.1	0.23	
第9図 4	鉄鎌	3.1	1	0.35	方頭形鉄鎌か
第9図 5	鉄鎌	3.7	0.6	0.5	茎部のみ

※法量はいずれも最大値

# 第4章 まとめ

## 第1節 横穴墓

### (1) 形態と年代

横穴墓は、工事中の不時発見であったため、奥壁・側壁・天井の構造は不明といわざるを得ない。雲南市加茂町域では、湯後横穴墓群で8基、土井・砂横穴墓群で7基の発掘調査が行われている。このうち、湯後横穴墓群の2・3・4・7号穴は、前庭部・羨道・細長い両袖式の玄室をもち、玄室規模も類似するが、いずれも天井部が崩落しており、その状況は判然としない（島根県教育委員会2001）。開口する横穴墓には、玉尾谷尻横穴墓群・穴の前横穴墓群・神原横穴墓群などがあるが、実測調査されたものは玄室の横断面が三角形で妻入りとなる（西尾・坂本・稲田・松尾2007）。

斐伊川中流域における横穴墓は、須恵器の出雲編年3期の三刀屋町東下谷横穴墓群6号穴が最も遡るものだが、この段階から玄室は断面三角形妻入りである（三刀屋町教育委員会1984）。出雲4期～5期にかけては横穴墓が中流域の各地に広がりを見せる段階で、玄室は細長い長方形をした平面形をもち、天井形態はいくつかの例外を除いて断面三角形妻入りが定着するとされている（西尾・坂本・稲田・松尾2007）。

宇治西Ⅲ遺跡横穴墓は、前庭部に羨道と細長い両袖式の玄室が接続し、後述するように出雲5期に位置づけられる。その構造が類似し、同時期に営まれた横穴墓には木次町下布施横穴墓群1・3・5号穴（木次町教育委員会2002）、三刀屋町太田横穴墓群1・2号穴（三刀屋町教育委員会1984）などがあるが、玄室の天井形態は断面三角形妻入りである。こうした周辺地域の状況からすれば、宇治西Ⅲ遺跡横穴墓も同様な玄室の構造をもっていたことが推察される。

出土した須恵器には、蓋坏・高坏・甗・直口壺・平瓶・提瓶・壺がある。坏蓋は、口径が12cm前後で、ヘラケズリ調整が省略される。坏身は短いかえりが付き、底部はヘラケズリ調整されていない。高坏は坏部が浅く、外面に僅かに稜を残す。脚部を欠くが、低脚で2方向に透かしをもつものであったとみられる。甗は、頸部の波状文や体部の刺突文がなく、頸部に対し口縁部が大きい。平瓶は、口縁が単純な筒形になり、肩部には把手の痕跡である円形粘土が貼り付けられる。提瓶は、壺として成形された土器の肩部につぶれた環状の把手を付け、体部側面を中心にカキメを施した特異なものである。

このような須恵器の特徴は、出雲5期に位置づけられ、陶邑編年のTK217併行期とされる（大谷1994）。提瓶は類例をあまり見ないものであるが、退化した把手や出土状況からすれば、同じ時期に副葬されたものと考えて差し支えなからう。

### (2) 斐伊川中流域の後期古墳における位置づけ

宇治西Ⅲ遺跡に近い三代古墳は、径10mほどの円墳とされ、横穴式石室をもつ。大規模な古墳ではないが、金銅装双龍環頭大刀が出土している。大刀は環体を鍛造成形するなど最新の型式で、後述するように大刀の量産化が進んだ段階のものであり、TK209～TK217型式併行期とみられる（西尾・坂

本・稲田・松尾2007)。宇治西Ⅲ遺跡の被葬者が象嵌装大刀を受ける前段階に、至近に金銅装双龍環頭大刀が与えられた勢力がいたことがまず注意される。

三代古墳が築造された出雲4期には<sup>(2)</sup>、大東町寺谷尻古墳、三刀屋町岩広古墳でも横穴式石室が営まれており、大刀や馬具が出土している。このうち、寺谷尻古墳出土の鉄地金銅装雲珠は類品が松江市岡田山1号墳・御崎山古墳にある優品で(西尾・坂本・稲田・松尾2007)、初葬を示すものであるなら出雲3期に遡る可能性も考えられる<sup>(3)</sup>。横穴墓では、平ヶ廻横穴墓で金銅装刀子が出土しているが、この段階までは横穴式石室の被葬者層に大刀や馬具の所持が限られそうである。

一方、出雲5期に入ると、横穴式石室の築造はほぼみられなくなると同時に、横穴墓の被葬者層に大刀や馬具が広がる。宇治西Ⅲ遺跡横穴墓出土の象嵌装大刀は、こうした状況の中で副葬されたものといえる。横穴墓出土の装飾付大刀の中には、双龍環頭大刀や象嵌装大刀のように畿内政権あるいはその中枢の特定氏族の下で一元的に製作、配布されたとは考えられないものも含まれる。下布施横穴墓群1号穴の大刀は、柄間が有機質の紐巻きで、柄縁を金銀装とする(木次町教育委員会2002)。東下谷横穴墓群4号穴で出土した大刀2振は、ともに鞘装具に黒漆塗りを施したもので、大刀1は柄巻きに紐状有機物を螺旋状に巻くほか、大刀2は喰出鐔・環付足金物など銅製装具を多用する(西尾・坂本・稲田・松尾2007)。これらは大刀の地方生産も含めて検討する必要があるとされており<sup>(4)</sup>、装飾付大刀の配布は畿内政権により一元的に行われただけではなかったようである。

斐伊川中流域においては、傑出した規模・内容をもつ後期古墳はなく、地域をまとめるような大首長の存在は確認できない。その様相から、当地域は「斐伊川下流域(出雲西部)あるいは出雲東部の大首長に緩やかな従属し、不明瞭な秩序の下で、中位・下位に位置づけられていた可能性」が考えられている(西尾・坂本・稲田・松尾2007)。4期には横穴式石室を築造していた中位層は、5期になると横穴墓を造るようになったようだ。結果として横穴墓の営造層が広がったわけであるが、彼らの中でも特定の職掌や役割を担っていた人物に装飾付大刀が与えられ、その一人が宇治西Ⅲ遺跡横穴墓の被葬者であったとみられる。

第3表 雲南市の大刀・馬具等が出土した後期古墳

遺跡名	所在地	埋葬施設	大刀・馬具等	時期	文献等
三代古墳	加茂町三代	横穴式石室	金銅装双龍環頭大刀・鉄斧	4・5期	西尾・坂本・稲田・松尾2007
寺谷尻古墳	大東町下久野	横穴式石室	大刀・鉄地金銅装雲珠・刀子・鉄鎌	4・5期	大東町教育委員会1996
岩広古墳	三刀屋町上熊谷	横穴式石室	直刀・轡・鎌・刀子	4・5期	西尾・坂本・稲田・松尾2007
平ヶ廻横穴墓	木次町寺領	横穴墓	金銅装刀子・耳環	4・5期	西尾・坂本・稲田・松尾2007
下布施1号横穴墓	木次町北原	横穴墓	金銀装大刀・鉄鎌・刀子・耳環	5期	木次町教育委員会2002
湯後2号横穴墓	加茂町延野	横穴墓・家形石棺		5期	鳥根県教育委員会2001
湯後4号横穴墓	加茂町延野	横穴墓・箱形石棺	大刀・鉄鎌・刀子	5期	鳥根県教育委員会2001
宇治西Ⅲ横穴墓	加茂町三代	横穴墓	銀象嵌装大刀・鉄鎌	5期	本報告
東下谷4号横穴墓	三刀屋町中野	横穴墓	黒漆塗大刀・銅製装具付黒漆塗大刀・勾玉	5期	三刀屋町教育委員会1984
東下谷5号横穴墓	三刀屋町中野	横穴墓	大刀・鉄鎌・槍鉋・鉄斧・勾玉	5期	三刀屋町教育委員会1984
太田2号横穴墓	三刀屋町殿河内	横穴墓	轡・鉄斧・刀子・金環	5期	三刀屋町教育委員会1982

## 第2節 象嵌装大刀

### (1) 象嵌装大刀の年代的位置づけ

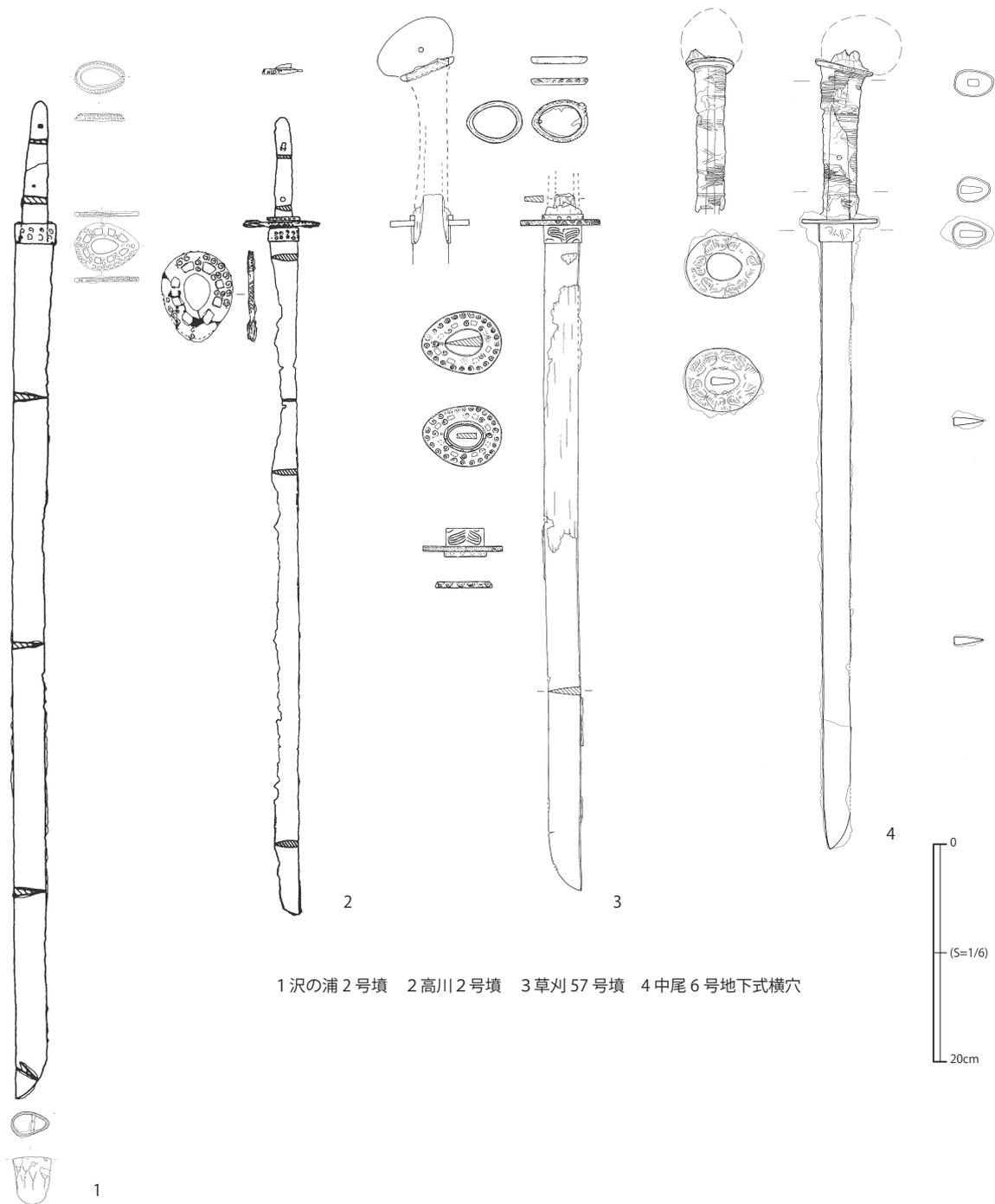
宇治西Ⅲ遺跡から出土した象嵌装大刀は切羽縁金具、柄縁責金具、鐔、釧、鞘尻金具に銀象嵌が施されている。このうち年代の検討の材料となるのが、鐔などに施された心葉文の象嵌と鞘尻金具に施された羽状文の象嵌である。すでに象嵌心葉文の変遷は橋本博文氏や西澤正晴氏、大谷晃二氏が検討している。橋本氏は鳥文から心葉文、心葉文の周囲を線で埋めないものに変遷すると指摘している(橋本1993)。西澤氏は心葉文の退化が2系統に分かれることを指摘している(西澤2000)。大谷氏は心葉文について、鳳凰文を祖型に鳳凰の頭部を表現する(鳥文型)から心葉文の中を線で充填する線充填系列と輪郭線と相似形の線を充填する重ハート系列に分岐することを指摘する。さらにそれらについて心葉文の端部表現や外形、中の表現方法などから分類している(大谷2018)。

宇治西Ⅲ遺跡で出土した象嵌鐔の心葉文は、心葉文の中を輪郭線と相似の線で埋め、心葉文が扁平につぶれている特徴から大谷氏の重ハート系列・扁平多重型に相当する。この分類はTK209形式期に出現することが指摘されている。

次に鞘尻金具に施された羽状文をみてみよう。この象嵌文様については瀧瀬芳之氏によって整理されている(瀧瀬2011)。この羽状文は2段の鱗状文と頂線で構成され、瀧瀬氏の分類のうちU3b類に該当する。瀧瀬氏はこの文様について第6段階に位置づけており、TK209型式期を中心とした時期をあてている。以上から、象嵌鐔と鞘尻金具の位置づけに矛盾はないといえる。

次に大刀の拵え全体から位置づけについて考えてみることにしたい。象嵌装大刀の拵え全体からの位置づけは大谷宏治氏の検討がある(大谷宏2011・2024)。宇治西Ⅲ遺跡出土象嵌装大刀の柄頭は失われているが、切羽縁金具の出土から象嵌木芯頭椎大刀であると考えられる。大谷氏によるとⅡ段階前半に象嵌円頭大刀から派生して象嵌頭椎大刀が成立したとされる(大谷宏2011)。この段階においては柄頭が確認されていないものの装具の組合せから木装漆塗柄頭の象嵌装大刀が生産されていたことが指摘されている。また鐔の象嵌文様から柄頭の形式が想定されており、圏線C字文鐔<sup>(5)</sup>、渦巻文鐔付大刀は頭椎大刀である可能性が指摘されるが、一方で心葉文鐔は円頭大刀に伴うことが指摘される(大谷宏2011・2012・2024)。宇治西Ⅲ遺跡出土象嵌装大刀は象嵌木芯頭椎大刀であると考えられるが、鐔に施されるのは心葉文である。Ⅱ段階後半～Ⅲ段階にかけて基本的系列から他系列の特徴を有する装具を配する例が増加するなど、生産体制の再編があったと想定される(大谷2011)。実際にⅢ段階に位置づけられる平田14号墳出土例は円頭大刀であるが、鐔に渦巻文、鞘尻に羽状文が施され、その文様は頭椎大刀に用いられるもので、拵えは円頭大刀と頭椎大刀の折衷的様相であると考えられる。また、渦巻文鐔付大刀と心葉文鐔の関係が強いことも指摘されている(大谷宏2024)。

前述のとおり、宇治西Ⅲ遺跡出土象嵌装大刀は頭椎大刀に採用される羽状文が施された鞘尻金具を有するが、鐔は心葉文である。これらのことから宇治西Ⅲ遺跡出土象嵌装大刀は、装具の組合せに融合がみられるⅢ段階に製作されたものと考えられる<sup>(6)</sup>。実際に象嵌木芯頭椎大刀が想定される沢の浦2号墳出土例や高川2号墳出土例などでは渦巻文を施した象嵌鐔を有し基本的な文様の組



1 沢の浦 2号墳 2 高川 2号墳 3 草刈 57号墳 4 中尾 6号地下式横穴

### 第10図 象嵌木芯頭椎大刀の類例

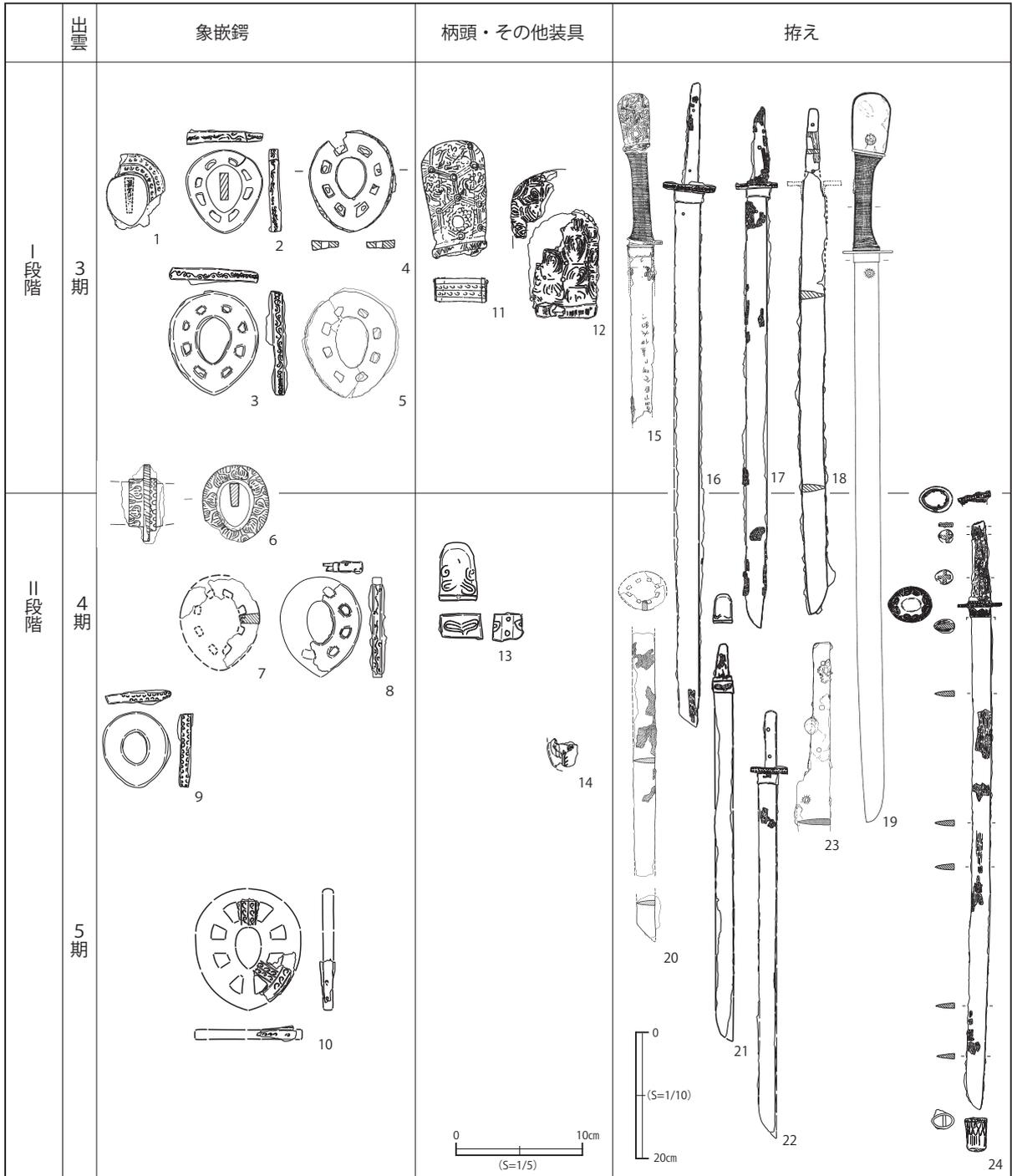
合せを守っているが、鐔に渦巻文を施しながら鍔には心葉文を施す草刈57号墳出土例や鐔に心葉文を施す中尾6号地下式横穴出土例はⅢ段階に位置づけられる。Ⅲ段階における生産体制の再編にあたって、工房の統合などが行われた可能性があるだろう<sup>(7)</sup>。Ⅲ段階は大谷宏治氏によって、TK209型式期後半以降の時期が当てられており、宇治西Ⅲ遺跡出土象嵌装大刀はTK209型式期後半以降に製作されたものと考えることができ、出土した須恵器などからも矛盾はない。

第4表 鳥根県内出土象嵌装大刀集成

	遺跡名	所在地	墳丘	主体部 (長・幅・高 [m])	棺	大刀	象嵌の 種類	副葬品	その他の 遺物	時期	備考	文献
1-1	小汐手a	安来市黒井田町	横穴	-	-	象嵌装大刀	波状C字状文				象嵌は八窓鐺の耳部分	吉松2019
1-2	小汐手b	安来市黒井田町	横穴	-	-	象嵌装大刀	交互半円文				象嵌は無窓鐺の耳部分	吉松2019
※	小汐手A-2号横穴	安来市黒井田町	横穴	-	-	象嵌装大刀	-	鉄刀、鉄鎌4、白玉、刀子5、須恵器		3~5期		大谷・松尾2004
※	小汐手B-4号横穴	安来市黒井田町	横穴	-	-	象嵌装大刀	-	鉄刀、耳環2、須恵器、土師器		3~5期		大谷・松尾2004
2	宮内遺跡Ⅱ区1号横穴	安来市宮内町・佐久保町	横穴	ドーム・方形(玄室:3・2.6・1.4)	組合せ式家形石棺	象嵌装大刀	波状C字状文	鉄鎌11、方形立開付素環鏡板付轡、鉄地金銅張磯金具、木製壺蓋、鞍金具2、飾金具2		3期	象嵌は八窓鐺の耳部分、鍔本孔	宮本・山尾(編)1993
3	鳥田池遺跡1区2号横穴	松江市東出雲町出雲郷字岸尾、掛屋字鳥田他	横穴(前方後方形の背墳丘20m前後)	平入家形・正方形(玄室:2.15・2.45・1.6)	右袖:須恵器床	象嵌円頭大刀、倭風大刀(水晶製三輪玉)	心葉形文	鉸具3、木芯鍔吊金具3、鉸具造環状鏡板付轡、瑪瑙製勾玉5、碧玉製管玉3、水晶製切小玉5、小玉7、鉄鎌9、刀子、鉄斧、耳環3		4期	象嵌は柄頭、鍔倭風大刀は鍔本孔	原田ほか1997
4	古天神古墳	松江市大草町	方方・27m	両袖横穴式石室(玄室:1.65・2.1・1.5)	屍床	銀装円頭大刀、金銅装大刀1以上、象嵌装大刀	心葉形文	旋回式獣像鏡系倭鏡、金環3、銀環3、鉄刀6、鉄剣、短刀10以上、鉄鎌26以上、刀子8以上、砥石、素環鏡板付轡2、鉄地金銅張半球状鉢多脚系雲珠、鉄地金銅張半球形鉢辻金具3	円筒埴輪	3~4期	象嵌は鍔、鍔柄縁貴金具	岩本(編)2018
5	岡田山1号墳	松江市大草町	方方・24m	両袖横穴式石室(玄室:2.8・1.8・2.2)	家形石棺	象嵌円頭大刀、金銀装大刀、金銀装円頭大刀	亀甲鱗文	刀子3、鉄鎌、弓筋金具、内行花文鏡、金銅製丸玉、耳環2、鞍金具、鉄地金銅張心葉形十字文鏡板付轡、雲珠2、辻金具4、馬鈴6、環状繫絡金具、須恵器	円筒埴輪	3期	「額田部」臣銘文、鍔、鍔にも象嵌	松本(編)1987
6	奥山遺跡B-Ⅱ号横穴	松江市浜乃木町2751番地ほか	横穴	方形(玄室:2.1・1.8)	-	象嵌装大刀	連弧輪状文	須恵器		7世紀前半?	鍔本に連弧輪状文象嵌・天井部崩壊	三宅・北脇・萩(編)1988、丹羽野2012
7	上塩冶築山古墳	出雲市上塩冶町築山	円・45m	両袖横穴式石室(玄室:6.6・2.8・2.9)	家形石棺(大小2)	金銀装円頭大刀・振り環頭大刀	連弧輪状文(円頭鍔本)	金銅製冠、銀環2、勾玉7、瑪瑙製霰玉、ガラス管玉、水晶製算盤玉、水晶製丸玉6、ガラス小玉60、ガラス丸玉5、粟玉17、大刀2、銀装鞍金具、鉄鎌32、矛13(三角穂・鎬造り)、石突【Aセット】鉄地金銀装十字文透心葉形鏡板付轡、鉄地金銅装心葉形杏葉7、鉄地金銀装8脚雲珠、鉄地金銀装6脚辻金具4、鉄地金銅装4脚辻金具8、鉄地金銀装磯金具・覆輪、木芯鉄張壺蓋、鉸子2、青銅製鈴5、鉸具類4、陸泥吊り金具【Bセット】銜・引手片、鉄地銀装心葉杏葉、鉄地銀装8脚雲珠、鉄地銀装4脚辻金具、鞍輪金、鞍座金具、木装大形刀子、鹿角装刀子7、鉄斧、鉤状鉄器11	円筒埴輪・子持壺	3期	円頭大刀は大石棺、振り環頭大刀は小石棺	松本(編)1999
8	上塩冶第8支群3号横穴	出雲市上塩冶町	横穴	家形?(1.31以上・2.27)	-	象嵌装大刀	波状C字状文	鉄刀2(うち1は象嵌装大刀)、刀子3		6世紀末?	象嵌は八窓鐺の耳部分	遠藤(編)2003
9	放れ山古墳	出雲市	円・13m	横穴式石室(玄室:1.7・3.27・2.05)	3体分の有縁屍床	金銅装圭頭大刀・金銅装小刀・銀装大刀・銀象嵌大刀	-	鉄刀(1本以上、鍔元孔鉄刀)、鉄製鞘尻金具、金銅装刀子、刀子、鉄地金銅張輻葉形鏡板付轡、鉄地金銅張輻葉杏葉3、鉄地金銅張8脚雲珠、鉄地金銅張辻金具2、鉄製矩形立開素環鏡板付轡(片側の立開孔には革帯残存)		4期	大正時代に開口、象嵌は八窓鐺の耳部分	勝部・西尾(編)1980、大谷・松尾1999
10	妙蓮寺山古墳	出雲市下古志	方方・49m	両袖横穴式石室(玄室:4.4・1.9・2.2)	家形石棺	象嵌円頭大刀	亀甲鱗文	ガラス丸玉、金銅鈴銅、刀子、鉄斧3、鉄鎌、轡、鞍磯金具、木芯鉄張壺蓋、鉄地金銅張雲珠(十脚、六脚)、鉄地金銅張辻金具4、鉄地金銅張心葉形三葉文杏葉、鉄地金銅張無文心葉形杏葉3、鉄製鉸具3、金銅方形金具、須恵器	円筒埴輪	3期	玄門観音開き	山本1964
11	神門第10支群H-4号横穴	出雲市神門町	-	アーチ・楕円形(玄室:1.5・1.6)	-	象嵌装大刀	圓線C字状文/C字状文	耳環2、須恵器		出雲5期	耳・平面上に象嵌	石原2021
12	宇治西Ⅲ遺跡	雲南市加茂町	-	-	-	象嵌木芯頭椎大刀	半円文/心葉文/二重半円文/羽状文	鉄鎌5、須恵器		出雲5期		本書
13	大西大師山遺跡17号横穴	大田市久手町波根西	横穴	ドームorアーチ・縦長長方形(2.3・2.1・1.0)	屍床(玄室右側)	象嵌円頭or鞘尻	心葉形文	鉄刀、鉄鎌3以上、刀子		3~4期	屍床のない玄室左側から遺物出土	宮本(編)2016
14	唯山古墳	隠岐郡海士町福井	円	横穴式石室	-	象嵌装大刀	波状C字状文	瑪瑙製勾玉12、水晶製切子玉4、瑪瑙製小玉、ガラス小玉351、白玉23、大刀2、六窓鐺、八窓鐺(象嵌)、刀子2、鉄鎌4or5		3期、4期	象嵌は八窓鐺の耳部分	高橋2004
15	大座西遺跡2号墳	隠岐郡隠岐の島町下西	-	横穴式石室	棺台あり	象嵌装大刀	波状C字状文	鉄刀4(うち1は鍔元孔鉄刀?)、鉄製鍔、有窓鐺片2、鉄矛、両頭金具、鉄鎌45、刀子5、鹿角装刀子、鉄斧4、耳環5、銅碗、銅製帯金具(鉄具、巡方3or4、丸鞘3、鉈尾)、瑪瑙製勾玉6、碧玉製勾玉3、水晶製勾玉、水晶製切子玉、ガラス丸玉、土製小玉、須恵器、土師器、暗文土師器		6世紀後半	象嵌は八窓鐺の耳部分	横田・野津2006

## (2) 島根県域における象嵌装大刀の位置づけ

宇治西Ⅲ遺跡出土例は島根県域における象嵌装大刀としては、16例目となる。多くは出雲部に集中し、石見部に1点（大田市大西大師山17号横穴）、隠岐に2点（唯山古墳、大座西2号墳）が知られる（吉松2019・2021）。ここでは出雲地域を中心として、象嵌装大刀と金銅装装飾付大刀の展開を整理したい。



1・11・15 岡田山1号墳 2・16 宮内Ⅱ区1号横穴 3・17 小汐手 a 4・17 唯山古墳 5 大座西2号墳 6 古天神古墳  
 7・20 放し山古墳 8 上塩冶横穴墓群第8支群3号横穴 9・22 小汐手 b 10 神門第10支群H-4号横穴 12 妙蓮寺山古墳  
 13・21 島田池1区2号横穴 14 大西大師山17号横穴 19 上塩冶築山古墳 23 奥山B-II号横穴 24 宇治西Ⅲ遺跡

第11図 島根県内出土象嵌装大刀の変遷

### ① I 段階（出雲 3 期）

出雲地域では、東西で偏在的な装飾付大刀分布を示すことが知られる（大谷1999・松尾2005）。すなわち東部に半島系環頭大刀、西部に倭系大刀が分布する段階である。近年、出雲東部においても中枢域の意宇地域で倭系大刀（工房 A）が分布する状況が明らかになった（吉松2022など）。ただし、多くが倭系円頭大刀で東部では未だ振り環頭大刀は確認されておらず、その点には注意が必要である。

象嵌装大刀は東部で岡田山1号墳と古天神古墳、宮内Ⅱ区1号横穴、小汐手横穴墓群、西部で上塩冶築山古墳（金銀装円頭大刀の刀身）と妙蓮寺山古墳で知られている。このうち、柄頭の判明する岡田山1号墳や妙蓮寺山古墳はいずれも円頭大刀である。いずれの古墳も東部、西部で最高首長層を補佐するようなNo.2クラス古墳などに位置づけられる。円頭大刀は金銅装を頂点とする仕様による階層性が表出されていることが指摘されている（橋本2013・2014）。いずれも象嵌円頭大刀であることから、古墳の階層によっても大刀の選択性が表現されている可能性があるかもしれない（吉松2019）。

また、装飾付大刀に表現されるものは特定氏族との関係や職掌・役割が反映されている可能性が指摘されている。筆者は職掌や役割が反映されている立場をとり、西部では倭系大刀であることから軍事、東部では半島系環頭大刀と倭系大刀から外交と軍事の役割が与えられていた可能性を想定している（吉松2024）。安来地域の横穴墓群を意宇中枢の首長層の下位に位置づけることが許されるのであれば、鉦元孔鉄刀に象嵌鐔を装着する宮内Ⅱ区1号横穴や小汐手横穴墓群で出土している事例は、意宇中枢の首長を軍事の面で支えた首長層を想定できるかもしれない。

### ② II 段階（出雲 4 期～）

この段階になると装飾付大刀の偏在的な分布は解消され、同様の形式の装飾付大刀が東西に分布し、山間部にも分布が拡大する（大谷1999、松尾2005）。横穴墓にも副葬が拡大し、宇治西Ⅲ遺跡出土象嵌装大刀もこの段階に副葬される。

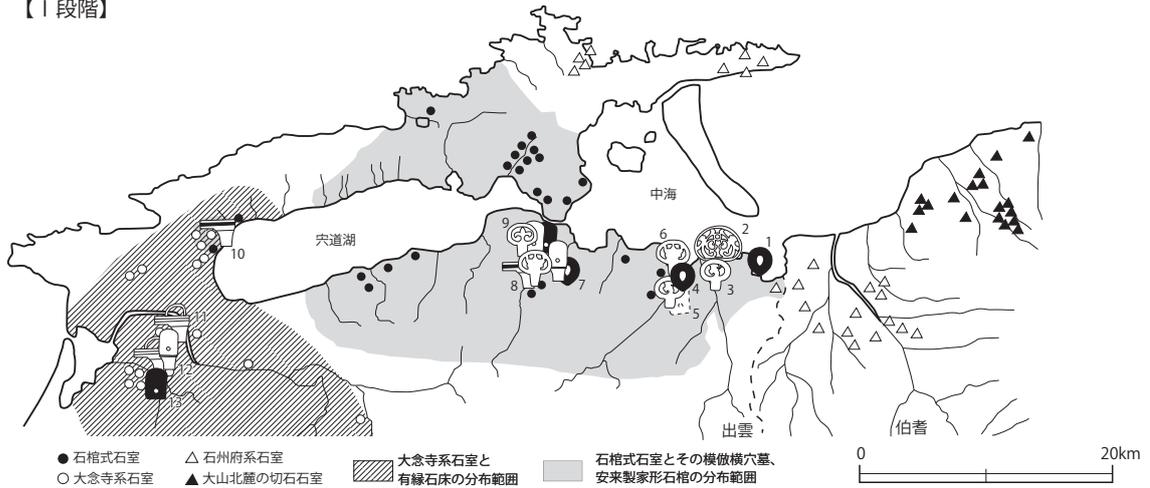
象嵌装大刀は東部で島田池1区2号横穴と奥山B-Ⅱ号横穴、西部で放レ山古墳、上塩冶横穴墓群第8支群3号横穴、神門第10支群H-4号横穴が知られる。西部では鐔のみの出土である。東部の島田池1区2号横穴は心葉文を施す象嵌装円頭大刀、奥山B-Ⅱ号横穴は刀身に連弧輪状文が施される。奥山B-Ⅱ号横穴は出土した須恵器からこの段階に位置づけるが、出土した象嵌装大刀はこの段階に位置づけることが躊躇されるもので、伝世された可能性がある（三宅1985）。この象嵌装大刀が王権で伝世し、この段階に出雲地域にもたらされたか、出雲地域内で伝世したかは重要な課題である<sup>(8)</sup>。

宇治西Ⅲ遺跡出土象嵌装大刀はこの段階に位置づけられる象嵌木芯頭椎大刀である。頭椎大刀は仕様による階層性が見出される大刀である（橋本2013・2014）。すなわち金>銀>木の階層構造である。宇治西Ⅲ遺跡出土象嵌装大刀は柄頭を木製、その他装具に銀象嵌を施す。柄頭を基準にするのであれば、銀と木の間の階層に位置づけることができる資料といえ、銀以下の階層は非常に細かい階層構造を示していた可能性があるだろう。

### （3）象嵌装大刀からみた宇治西Ⅲ遺跡の被葬者像

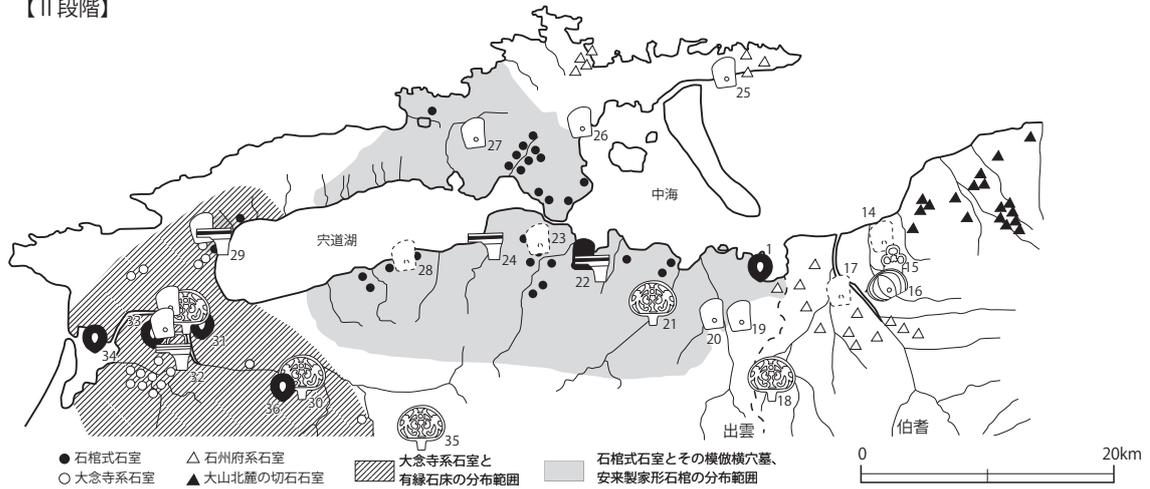
最後に象嵌装大刀からみた宇治西Ⅲ遺跡の被葬者像について考えてみたい。前述のとおり、装飾付大刀に職掌・役割が反映されていると考えている<sup>(9)</sup>。宇治西Ⅲ遺跡出土象嵌装大刀は象嵌木芯頭椎大

【I 段階】



- 1 小汐手横穴墓群 2 高広Ⅳ区1号横穴墓 3 白コクリ S-2号横穴墓 4 宮内Ⅱ区1号横穴墓 5 鷺の湯病院跡横穴墓 6 仏山古墳  
7 古天神古墳 8 御崎山古墳 9 岡田山1号墳 10 上島古墳 11 大念寺古墳 12 上塩治築山古墳 13 妙蓮寺山古墳

【II 段階】



- 14 大転場 29号墳 15 岡成 の古墳 16 石州府 1号墳 17 二子塚古墳 18 武信 の古墳 19 中山横穴墓 20 烏木横穴墓 21 かわらけ谷横穴墓  
22 島田池 1区 2号横穴墓 23 向山 1号墳 24 奥山遺跡 B-II号横穴墓 25 福浦法田峠 2号墳 26 連行 1号横穴墓 27 高田尾横穴墓  
28 松石横穴墓 29 中村 1号墳 30 三代古墳 31 上塩治横穴墓群 32 築山 3号墳 33 放し山古墳 34 神門第 10支群 H-4号横穴墓  
35 原田古墳 36 宇治西Ⅲ遺跡

【凡例】



第12図 出雲地域の装飾付大刀の分布

刀であると考えられることから軍事的役割を担っていた可能性も考えられる。ここで注目したいのは、北部九州の状況である。福岡県大野城市では窯廃絶後に墓に転用された牛頸梅頭1号窯跡で象嵌装大刀、金工生産を担ったと考えられる善一田古墳群のうち2号墳で象嵌装大刀が出土している。齊藤大輔氏は、これらの被葬者は出土遺跡などの状況から、被葬者が生産にかかわる人物であると想定し、あくまで「大野城モデル」としながらも生産拠点にこれらの象嵌装大刀が配布されたと想定している（齊藤2017）。このことを参考に雲南市域の状況をみると、掛合町では6世紀後半に位置づけられる羽森第3遺跡で製鉄炉が検出されている（掛合町教育委員会1998）。加茂町域では製鉄関連の遺跡や遺構は未確認で、想像の域を出ないが宇治西Ⅲ遺跡の被葬者はこうした製鉄などの生産にかかわった被葬者を想定することができるかもしれない。

近傍の宇治西Ⅱ遺跡からは銅製巡方が出土している（雲南市教育委員会2021）。安来市高広遺跡Ⅳ区の事例などから、装飾付大刀保有者層、あるいはその周辺の人々の末裔が律令期に官人に登用された可能性（齊藤2023）も指摘されており、宇治西Ⅱ・Ⅲ遺跡も古墳時代から律令期へと変遷する、有力者層の装いの変化がみてとれる好例といえよう。

## 註

- (1) 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム松下孝幸館長に調査を依頼している。人骨は1体分で、尺骨、上腕骨、大腿骨などが残っており、成人男性とみられる。上肢骨が太く、上肢筋の発達がきわめて良好であることから、日常的に上肢を酷使する生活をしてきたことが推測できる。詳細は、あらためて報告することとしたい。
- (2) 三代古墳の須恵器についての評価は、報告の本文では出雲3～4期、環頭大刀の評価では4～5期とされており、齟齬がある（西尾・坂本・稲田・松尾2007）。両者の峻別が難しい資料ではあるが、本稿では蓋環に4期から加わるA4型がみられること、低脚無蓋高環の脚部に5期に下る要素があることから、後者の立場をとる。
- (3) 吉松優希氏のご教示によれば、伴出した大刀の六窓鐔はTK209型式に出現するものという。他に年代を上げる要素がないことからすれば、出雲4期の築造としてもよからう。
- (4) 出雲市三田谷Ⅰ遺跡では、高い純度の金を再溶解するのに用いられた坩堝が出土している（島根県教育委員会1999）。時期は明確ではないが、金・金銅製品の製造が地方で行われたことを窺わせる。
- (5) 圏線C字文鐔の主体は円頭大刀であるが、頭椎大刀・圭頭大刀に派生した可能性が高い（大谷宏2024）。
- (6) 大谷宏治氏の御教示による。TK209型式期の中で象嵌文様は非常に短いスパンで変化するとともに拵えの組合せも融合するなど、大きな画期となるのだろう。
- (7) 金銀装装飾付大刀についてもTK209型式期に工房の統合が行われ、装具の共通化が図られている（大谷2022）。象嵌装大刀の生産にあたってこの段階に装飾付大刀と同様に工房の統一が図られ、生産体制の再編が行われた可能性が高い。ただし、金銀装装飾付大刀にみられる装具の統一化ではなく、象嵌装大刀については基本的な文様の組合せは守りつつも、他系列の装具を配するなど、文様の組合せに融合がみられる。工房の統一にあたっての再編の仕方に違いがあるのかもしれない。
- (8) 連弧輪状文は地域の首長墳出土資料に施されている場合が多い（西山1986、齊藤2009）。その中で横穴墓からの出土であることや共伴する遺物も少ない中でどのような評価を下すべきか、より検討する必要がある。また地域内での伝世を考えた場合はⅠ段階において出雲東部で倭系大刀の存在をさらに強調する存在になることは重要である。
- (9) 長野県の象嵌装大刀を集成した西山克己氏はシナノの舎人との関連を推定する（西山2016・2017）。

## 参考文献

- 石原聡（編）2021『神門横穴墓群 第10支群』出雲市教育委員会
- 岩本崇（編）2018『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会  
雲南市教育委員会2021『宇治西Ⅰ・Ⅱ遺跡』
- 遠藤正樹（編）2003『上塩冶横穴墓群第8支群』出雲市教育委員会
- 大谷晃二1994「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会
- 大谷晃二1999「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
- 大谷晃二2018「古天神古墳出土大刀の時期と系譜」『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会
- 大谷晃二2022「金銀装大刀からみた金鈴塚古墳の被葬者像」『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』六一書房
- 大谷晃二・松尾充晶1999「放れ山古墳」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
- 大谷晃二・松尾充晶2004「島根県 装飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧（改訂版）」『島根考古学会誌』20・21 島根考古学会
- 大谷宏治2011「象嵌装大刀の変遷～円頭・頭椎・圭頭大刀を中心に～」『考古学ジャーナル』616 ニューサイエンス社
- 大谷宏治2012「象嵌装大刀の拵えについて」『馬越長火塚古墳群』豊橋市教育委員会
- 大谷宏治2024「象嵌装刀剣類出土古墳の様相」『見せる刀剣』第20回古代武器研究会発表資料集 古代武器研究会
- 掛合町教育委員会1998『羽森第2.羽森第3遺跡発掘調査報告書』
- 勝部昭・西尾克己（編）1980『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 木次町教育委員会2002『下布施横穴墓群・案久寺遺跡』
- 齊藤大輔2009「鏹本孔鉄刀の基礎的研究」『第3回東アジア考古学会・中原文化財研究院研究交流会予稿集』東アジア考古学会・中原文化財研究院
- 齊藤大輔2017「武装からみた善一田古墳群と6世紀の西北九州」『乙金地区遺跡群23』〈中巻〉大野城市文化財調査報告書159
- 齊藤大輔2023「武装具出土古墳からみた「東西出雲」の特質とその背景」『島根考古学会誌』第40集 島根考古学会
- 坂本豊治（編）2018『上塩冶築山古墳の再検討』出雲弥生の森博物館  
島根県教育委員会1999『三田谷Ⅰ遺跡（Vol.1）』  
島根県教育委員会2001『湯の奥遺跡、登安寺遺跡、湯後遺跡、土井・砂遺跡』
- 高橋弘丞2004「唯山古墳発掘調査概要報告」『隠岐の文化財』21（『島前の文化財』通巻33）隠岐島後教育委員会・海士町教育委員会・西ノ島町教育委員会・知夫村教育委員会
- 瀧瀬芳之2011「旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について—埼玉県内出土象嵌装遺物の研究（その2）—」『研究紀要』25 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 瀧瀬芳之・野中仁1995「埼玉県内出土象嵌遺物の研究—埼玉県の象嵌装大刀—」『研究紀要』12 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 西尾克己・坂本諭司・稲田信・松尾充晶2007『斐伊川中流域における後期古墳の様相』
- 西澤正晴2000「井田松江18号墳出土象嵌刀装具類について」『井田松江古墳群』戸田村教育委員会
- 西山克己2016「象嵌装大刀を持ったシナノの舎人たち」『長野県立歴史館研究紀要』22 長野県立歴史館
- 西山克己2017「象嵌装大刀を持ったシナノの舎人たち2」『長野県立歴史館研究紀要』23 長野県立歴史館

- 西山要一1986「古墳時代の象嵌一刀装具について」『考古学雑誌』72-1 日本考古学会
- 丹羽野裕2012「奥山古墳群・奥山横穴墓群」『松江市史』史料編2 考古資料 松江市史編集委員会・松江市
- 橋本英将2013「装飾大刀」『古墳時代の考古学』4 副葬品の型式と編年 同成社
- 橋本英将2014「金銅装頭椎大刀の製作技術と佩用者像」『文堂古墳』大手前大学史学研究所
- 橋本博文1993「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼記念論文集刊行会
- 原田敏照・丹羽野裕・中川寧・藤原尚幸1997『島田池遺跡・鶴貫遺跡』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 松尾充晶2005「出雲地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳』島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 松本岩雄（編）1987『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
- 松本岩雄（編）1999『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
- 三刀屋町教育委員会1982『太田横穴墓群発掘調査報告書』
- 三刀屋町教育委員会1984『東下谷横穴墓群発掘調査報告書』
- 三宅博士1985「奥山B-II号横穴出土大刀について」『季刊文化財』61 島根県文化財愛護協会
- 三宅博士・北脇孝夫・萩雅人（編）1988『島根女子短期大学移転予定地内奥山遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会
- 宮本正保（編）2016『大西大師山遺跡』国土交通省松江国道事務所・島根県教育委員会
- 宮本正保・山尾一郎（編）1993『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』IV（越峠遺跡・宮内遺跡）建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 山本清1964『妙蓮寺山古墳調査報告』島根県教育委員会
- 横田登・野津研吾2006『大座西遺跡発掘調査報告書』隠岐の島町土地開発公社・隠岐の島町教育委員会
- 吉松優希2019「島根県域出土の象嵌装大刀の諸様相」『島根考古学会誌』第36集 島根考古学会
- 吉松優希2021「H-4号横穴墓出土象嵌鏢について」『神門横穴墓群 第10支群』出雲市教育委員会
- 吉松優希2022「装飾付大刀からみた東西出雲論の現状と展望」『出雲・石見・隠岐の古墳文化』島根県立八雲立つ風土記の丘
- 吉松優希2024「武器・馬具からみた古墳時代後期の出雲地域」『地域と交流の考古学』日本考古学協会2024年度島根大会資料集 日本考古学協会2024年度島根大会実行委員会

## 挿図出典

- 第10図1：兵庫県教育委員会1987『沢の浦古墳群』、2：兵庫県教育委員会1991『高川古墳群』、3：千葉県教育振興財団文化財センター2007『千原台ニュータウン』XVI、鹿屋市教育委員会2012『科学で甦る1500年前の輝き 象嵌装大刀と古代吾平を探る』
- 第11図 岡田山1号墳：松本1987、唯山古墳：高橋2004、大座西2号墳：横田・野津2006、古天神古墳：岩本2018、放レ山古墳：大谷・松尾1999、島田池1区2号横穴：原田ほか1997、上塩冶築山古墳：松本1999、奥山B-II号横穴：三宅ほか1988、その他は吉松実測

# 写真図版





横穴墓不時発見時の状況（南から）



前庭部検出状況（南東から）



前庭部土層（東から）



玄室遺物出土状況（南から）



玄室遺物出土状況（南東から）



玄室遺物出土状況（東から）



玄室遺物出土状況（北から）



提瓶・甕出土状況（南から）



蓋杯出土状況（東から）



銀象嵌装大刀、人骨出土状況（東から）



人骨出土状況（西から）



前庭部完掘状況（南から）



横穴墓完掘状況（北から）



出土須恵器



須恵器蓋杯



須恵器蓋杯・高杯・甗・直口壺・平瓶



須恵器提瓶・壺



7-1



8-2  
佩裏



8-2  
刃部側



8-2  
鐺刃部側



8-2  
鐺柄側

銀象嵌装大刀



8-3  
佩裏



8-3  
刃部側



8-1  
佩表  
銀象嵌装大刀



8-1  
柄側



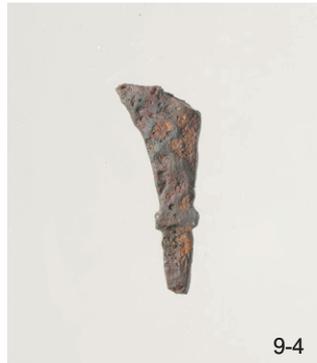
9-1



9-2



9-3



9-4



9-5

鉄鏃

# 報告書抄録

ふりがな	うじんざいさんいせき							
書名	宇治西Ⅲ遺跡							
シリーズ名	雲南市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	12							
編著者名	角田徳幸・高橋誠二・吉松優希							
編集機関	雲南市教育委員会							
	<a href="http://www.city.unnan.shimane.jp/www.toppage/">http://www.city.unnan.shimane.jp/www.toppage/</a>							
所在地	〒699-1392 島根県雲南市木次町里方521-1							
	Email:bunkazai@city.unnan.shimane.jp							
発行年月日	2025（令和7）年3月31日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宇治西Ⅲ遺跡	しまねけん 島根県 うなんし 雲南市 かもちょう 加茂町 みじろ 三代	32209	P124	35° 20' 4"	132° 53' 50"	2021 0624 ~ 2021 0705	16㎡	道路工事
要約	工事中に不時発見された横穴墓の調査。横穴墓は、前庭部・羨道・玄室が残るが、天井部は不明。床面より人骨をはじめ、大刀、須恵器蓋坏・高坏・甗・直口壺・平瓶・提瓶・壺が出土した。大刀は、木芯頭椎大刀とみられ、切羽縁金具・柄縁責金具・鐔・鉏・鞘尻金具に銀象嵌による文様が施される。島根県内における象嵌装大刀の出土例としては16例目となる。							

雲南市埋蔵文化財調査報告書 12

## 宇治西Ⅲ遺跡

加茂スマートインターチェンジ新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 2

発行 2025年 3月

発行者 雲南市教育委員会

編集 雲南市教育委員会

〒699-1392 島根県雲南市木次町里方521-1

電話 0854-40-1075

印刷 株式会社 谷口印刷